

平成24年度 講座「丹波学」 もののふたちの時代～平氏・源氏と丹波～



(公財)兵庫丹波の森協会
丹波の森公苑

目 次

1	講座「丹波学」の開講にあたって	・ ・ ・	1
2	講座内容		
	(1) 開講記念特別鑑賞会 淡路人形浄瑠璃 講義 中世丹波人と信仰	・ ・ ・	3
	(2) 現地見学 講義 達身寺の木彫仏群について	・ ・ ・	12
	(3) 講義 中世に生きる女たち ～昔と今の「家」の変化の中で～	・ ・ ・	20
	(4) 講義 平清盛の闘い 一幻の中世国家	・ ・ ・	21
	(5) 講義 中世丹波の国人と土豪	・ ・ ・	26
3	講師プロフィール	・ ・ ・	35
4	編集後記	・ ・ ・	36

1 講座「丹波学」の開講にあたって

1 丹波の森構想（丹波の森づくり）

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置する森の国です。篠山市と丹波市からなり、阪神大都市圏から50～70kmの近郊にありながら、森林面積が約75%を占め、豊かな自然や田園景観が残され、心のふるさとというべき大きな価値を持つ地域です。また、播磨、京都、大阪、日本海側からの街道が交差し、加古川、武庫川、そして、由良川の源流をなすことから様々な文化が入り交ざり、まさに文化の十字路として独特の文化を育んできました。

近年の社会情勢の変化はこの豊かな丹波の姿を急速に変えてきました。同時にそこに住む人々の心にも大きな変化を与えてきました。

こうした急激な社会変化に直面した現在こそ、新しい時代に向けて積極的に丹波の環境創造を進める丹波人の育成が必要になってきています。

このような状況で、かけがえのない美しい自然空間や、人々の営み、生活空間、生活文化、地域内外の人々の交流などを含め、「丹波の森づくり」に丹波をあげて取り組んでいます。この「丹波の森づくり」のベースになっているのが、人と自然と文化の調和した地域づくりを目指す「丹波の森宣言」です。

2 講座「丹波学」の開設

丹波の森公苑は、丹波の森づくりの拠点であるとともに、生活創造活動に必要な基本的な考えを提供し、共に考え実践する場を創造するところでもあります。

講座「丹波学」は「丹波の森宣言」の中で提起された「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。」という提言を主題として平成8年に開設しました。

今年で17回目を迎える本講座は、単な

る郷土史等の講座ではなく、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に研究する地域づくりを目指す地域学です。

3 平成24年度のテーマ

今回のテーマは、「もののふたちの時代～平氏・源氏と丹波～」です。

丹波国は畿内五カ国に接する山陰道第一の国で、早くから豪族が存在し、大和朝廷ともつながりをもっていたと言われています。また、古代より中央政権との関わりが深く、源平時代になると清盛の側近、平盛俊が丹波国諸荘園惣下司に任命されるなど、時代の政権を支える政治的・軍事的にも重要な舞台となりました。

今回は、こうした時代背景をもつ丹波地域の歴史にその名を残す武将たちの起こりとその後のドラマに焦点を当て講座を組み立てました。また、その時代を生きた庶民の暮らしについても「祭りや民俗芸能」を通して学び、当時の「家」「婚姻」そして女性たちの立場や思いといったものも絡めながら、学習を展開していきました。

丹波の森宣言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私はこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

- 1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。
- 2 丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。
- 3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。
- 4 丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

4 講座内容

- テーマ もののふたちの時代 ～平氏・源氏と丹波～
- 期 間 平成24年9月1日（土）～ 12月8日（土）
- 場 所 丹波の森公苑 多目的ルーム・達身寺（丹波市氷上町）
- 日 程

開催日	時 間	学習テーマ	講 師 等
9月 1日 （土）	12:30 13:00	受付 開講式・オリエンテーション 開講記念特別鑑賞会 『淡路人形浄瑠璃～戎舞～』	丹波の森公苑職員 県立淡路三原高等学校 郷土部のみなさん
	14:00～ 15:30	中世丹波人と信仰	園田学園女子大学教授 大江 篤 氏
9月29日 （土）	13:00～ 16:00	現地見学会と講義 達身寺の木彫仏群について 会場：達身寺（丹波市氷上町）	達身寺住職 渡邊 健臣 氏 京都造形芸術大学非常勤講師 杉崎 貴英 氏
10月20日 （土）	13:30～ 15:00	中世に生きる女たち －昔と今の「家」の変化の中で－	石川県立歴史博物館長 脇田 晴子 氏
11月10日 （土）	13:30～ 15:00	平清盛の闘い －幻の中世国家－	京都大学大学院教授 元木 泰雄 氏
12月 8日 （土）	13:30～ 15:00	中世丹波の国人と土豪	大山崎町歴史資料館学芸員 福島 克彦 氏

2 講義内容

(1-1) 開講記念特別鑑賞会

『淡路人形浄瑠璃〜戎舞〜』

県立淡路三原高等学校

郷土部のみなさん

〈淡路人形浄瑠璃の歴史〉

人形浄瑠璃といえば、近松門左衛門や文楽が思い浮かぶが、淡路の人形浄瑠璃は、近松が活躍した元禄（17世紀末）の頃にはすでに全国を興行していた。その足跡は各地に残り、長野県黒田、愛媛県大谷など各地に伝えられる人形芝居の多くは淡路系である。昭和62年には岩手県盛岡市で淡路人形が発見され、人形芝居のルーツとしての淡路人形が改めて注目されている。

淡路人形の起源は中世にさかのぼる。伝承によると、西宮戎神社に仕えていた傀儡師・百太夫が淡路の三条村（南あわじ市市三条）に人形操りを伝えたといわれている。

江戸時代になると、阿波藩主蜂須賀氏の庇護を受けて発展し、享保・元文のころ（18世紀前半）には座数40を越える全盛期を迎えた。のちに上方で文楽をひらいた植村文楽軒も淡路出身（一説に阿波）である。

淡路人形は野掛けの舞台上で上演されるのが普通で、そのため人形も文楽に比べて一回り大きく、ダイナミックな動きが特徴である。繊細さにおいては文楽と比べるべくもないが、太夫の座声と素朴で骨太な所作は、観客、舞台一体となった一種のエクスタシーを現出する。正月になると三番叟が家々を回り、祭礼には必ず人形芝居がかけられた。

人々は見て楽しむだけでなく、自ら浄瑠璃を語った。人形浄瑠璃は淡路の人々にとって、娯楽であるとともに生活儀礼であり、教養でもあった。

しかし、明治に入ると、淡路人形は近代化の波におされ、次第に衰退の道を辿ることになる。特に戦後の衰亡は著しく、現在興行しているのは淡路人形座ただ一つとなってしまった。危機に瀕した淡路人形を守るため、昭



和45年に淡路の1市10町によって（財）淡路人形協会が設立された。51年には国の重要無形民俗文化財に指定され、保存と普及のための活動が現在も積極的に行われている。

〈兵庫県立淡路三原高校郷土部〉

淡路人形保存活動の必要性が叫ばれ始めた昭和27年に、三原高校郷土部は生まれた。人形浄瑠璃は技術の習得が極めて難しいだけでなく、人形や道具類も手に入りやすく、練習は大変困難であったが、浄瑠璃と三味線の竹本友喜美師匠、人形の吉田新九朗師匠の熱心な指導と地域の支援により、淡路人形の伝承に取り組んできた。その間、全国各地で公演の機会を頂き、マスコミ等でも大きくとりあげられてきた。平成19年、志知高校との発展的統合により淡路三原高校となったが、郷土部の活動はそのまま受け継がれている。

現在、年間20回前後の公演を行っている。平成5年度及び10年度には全国高校総合文化祭で優秀賞（文化庁長官賞）を受賞。これは人形、浄瑠璃、三味線の三業すべて生徒が演じたことが評価されたもので、優秀校東京公演に招かれ、国立劇場の舞台に立った。海外公演も平成8年のハンガリー公演をはじめとして、カナダ、台湾、フランスと、4度にわたり行い、いずれも大成功を収めた。22年には花みどりフェアで、皇太子殿下の御前で演技を披露した。

(1-2) 中世丹波人と信仰

園田学園女子大学人間教育学部

教授 大江 篤

はじめに

本年度の講座丹波学では、兵庫県立淡路三原高等学校郷土部の淡路人形浄瑠璃を鑑賞した。この丹波地域には、民俗芸能として池尻神社の人形狂言（篠山市）や人形浄瑠璃のルーツともいわれる波々伯部神社（篠山市）のキウリヤマでのデコノボウがある。

また、人形はないが、川原住吉神社（篠山市）の水無月祭では、ヤマの上で三味線、胡弓、太鼓などによる打込囃子が演奏される。このお囃子の作者である遠山宗九郎は、明治時代に、大阪の文楽座で学び、帰郷後、ヤマ毎に打込囃子を作曲した。大阪の人形浄瑠璃の文化がこのように伝播し、丹波の地に根付いていることがわかる。

兵庫県教育委員会の民俗文化財調査で丹波地域を6年間、昨年度からは淡路島でフィールドワークを行っている。県下には、まだまだ数多くの貴重な民俗芸能が残されている。しかしながら、多くの祭礼や芸能は、少子高齢化の波にさらされ、消滅の危機を迎えている。祭礼行事や民俗芸能がなくなると、それを支えている心もなくなってしまう可能性が高い。地域が培ってきた歴史遺産をどのように継承していくのかは、地域にとって喫緊の課題である。

さて、本講座では、『平家物語』を読み解きながら、中世丹波の地に生きた人々の「信仰」について、その一端を紹介したい。あまり歴史の記録には残らない、当時の人々の心の動きについて考えたい。



1 『平家物語』と丹波

『平家物語』において丹波の地が出てくるのは巻第九「三草勢揃」「三草合戦」である。その梗概を紹介したい。三草山での合戦は一ノ谷の合戦の前哨戦に当たる。この合戦の後、平家は、有名な一ノ谷の合戦を迎える。

寿永三年（1184年）正月二十九日に源義経らが三種の神器を平家から奪還するために出陣する。2月4日、福原では故・清盛入道の命日ということで、仏事・叙位・除目が形どおりに執り行われた。平維盛は、都からたまに來る手紙を読むにつれ、都に残した妻子のことを心配しながら過ごしていた。

さて、源氏は二月四日に福原を攻めるはずであったが、故・清盛入道の命日であると聞き、仏事を遂げさせるため攻めなかった。五日は暦の上で西の方角がふさがった日、六日は道虚日のため避け、七日の卯の刻（午前六時頃）、一ノ谷の東西の木戸口で源平は矢合わせをすると決めた。しかし、四日は暦のうえで吉日なので、都を出発する日は四日と決め、軍兵を大手と搦手の二手に分けて都を出発した。

大手の大將軍は、蒲御曹司・源範頼、総勢五万余騎、四日辰の刻（午前七時）に都を發って、その日の申酉の刻（午後四時～六時頃）には摂津国昆陽野（現在の伊丹市）に布陣した。搦手の大將軍は、九郎御曹司・源義経である。義経は都から二日かかり、「播磨と丹波のさかひなる三草の山の東の山口に、小野原

にこそつきにけれ」とある。ここに義経が陣を張った場所として、「小野原」（篠山市）の地名を見るのである。

さて、平家方の大將軍には、小松新三位中将資盛、総勢三千余騎で小野原より三草山の西の麓に布陣した。

その夜の戌の刻（夜八時頃）、源義経は侍大將の土肥次郎を呼び「平家は、ここから三里隔てて、三草山の西の山口に大軍で布陣しているとのことである。今夜夜討ちにすべきか、それとも明日の合戦か。」と問われると、田代冠者信綱が進み出て「平家の勢は三千余騎、味方の勢は一万余騎、我らははるかに有利。合戦を明日に延ばせば、平家に援軍が到着する恐れあり、よって夜襲をかけるのが得策である。」と告げる。

つはもの共「くらははくらし、いかゞせんずる」と口々に申ければ、九郎御曹司「例の大だい松はいかに。」土肥次郎「さる事候」とて、小野原の在家に火をぞかけたりける。是をはじめて、野にも山にも、草にも木にも、火をつけたれば、ひるにはち（ッ）ともおとらずして、三里の山を越行けり。

兵たちが「こう暗くては、どうしたものか」と口々に言うと、義経が「大松明を焚いてはどうか」といい、小野原の民家に火を放つ。野山、草木に火を放つと、まるで昼間のごとく明るくなり、それに乗じて三里の山を越えていった。

平家方では、その夜に夜襲されるなどとはつゆ知らず、先陣の者のなかにはそれなりに用心するものもいたものの、後陣の兵たちは、明日の合戦に備え甲を枕にしたり、鎧の袖や簾などを枕にしたりして、ぐっすりと眠ってしまっていた。

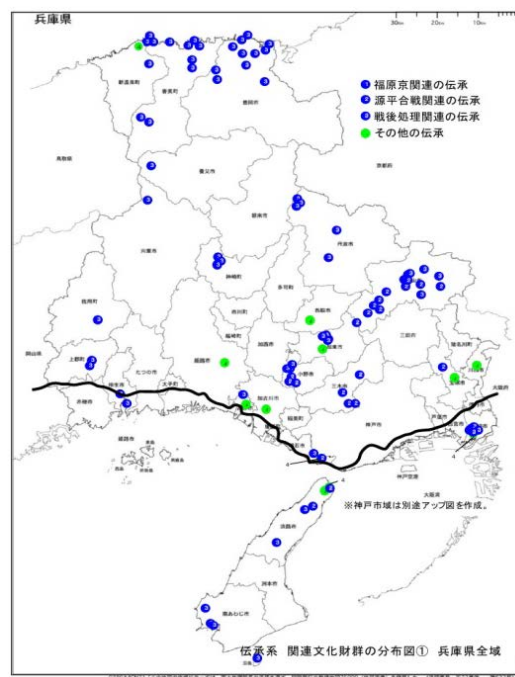
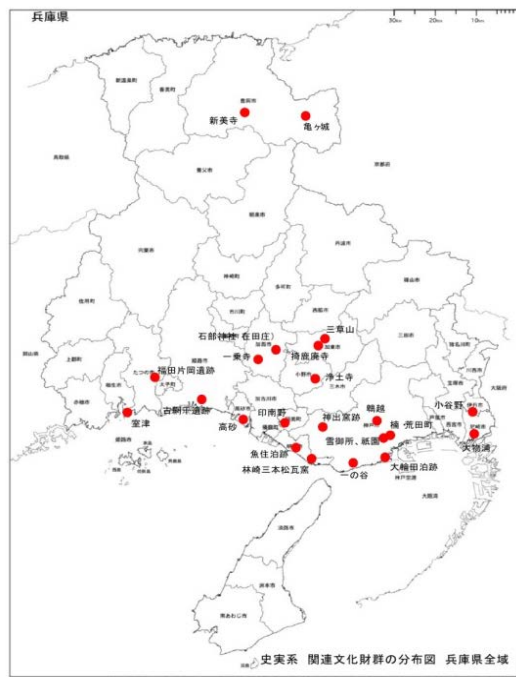
夜半頃に、源氏が一万騎、三草山の西の山

口に攻め寄せ、鬨の声をどっとあげた。平家方はあまりにあわて騒ぎ、弓を取る者は矢がわからず、矢を取る者は弓がわからない、慌てふためき、馬に蹴られまいと思っただけで、中を開けて源氏を通した。源氏は落ち延びる平家を、あちらに追いかけ、ここに追いつめたので、平氏の軍兵は五百騎があつという間に討たれた。負傷するものも多かった。平資盛だけが、播磨国高砂から船に乗って、讃岐国の八島に渡った。そして、平師盛は一の谷へ参られた。

以上が、義経が平家を討ち負かした三草山の合戦である。ここでは、「小野原」の民家が源氏の夜討のために、火をつけられ、戦場となった様子を知ることができる。

ところで、兵庫県教育委員会は、NHK大河ドラマ「平清盛」にちなんで『平清盛と源平合戦関連文化財群の調査研究』を発表した。そこでは、「関連文化財群」を「史実系」（地図1）と「伝承系」（地図2）に分け、各市町村から集められたデータを一覧表にするとともに、分布地図を作製している。「史実系」は、治承・寿永の乱の戦場となった瀬戸内海の沿岸部や福原を中心に分布している。

一方、「伝承系」は、北播磨から丹波にかけてと但馬の地域と濃密に分布している。「伝承系」とは、歴史的な事実は確証できないが、現代に至るまで、言い伝え、伝説として語られている場所が残っているところである。但馬地方には平家の落人伝説が多く伝わっている。丹波地方では、篠山市域を中心に、先に紹介した三草山合戦での源義経に関わる伝説が分布している。この他にも『篠山封疆志』には、いくつかの塚の伝説などが記されている。これらの伝承地をつなぐと、近世の京街道とは異なる中世の山道を示すことになる。



『丹南町史』は断定できないとしながらも「篠山川の南部の山麓を東西に進み、真南条から古市へ、そこから南北に分かれて市原で合流するコースをとったのではあるまいか」と推定している。伝説は、古道探る重要な歴史資料であるといえよう。

また、これらの伝説は地名とともに記憶されてきた。地名は歴史を考えていくうえで、とても大切なものだが、現代では改変されたり、忘れられたりしつつある。かつては、それぞれの地区に大字があってその中に小字があって、田圃の一枚一枚にまで名前がついていた。その名前を見ていくだけでその土地がどんな歩みをしてきたかがわかった。地名は必ずしも記録に残る歴史ではないが重要な歴史の生き証人である。源義経の話とともに伝えられてきた丹波の地名も、重要な歴史の遺産である。

ただし、伝承であるが故に史実として証明することはできない。したがって、歴史の事実ではないからといってこうした言い伝えは

荒唐無稽であると評価しがちである。しかし、その土地、土地に伝わっている言い伝えは、地域にとってかけがえのないものであり、現代まで伝承されていることはまぎれもない事実である。丹波の人々が記憶にとどめ、知識人たちが記録に残してきた地名を今後も残していくことが重要である。兵庫県下全域の源平合戦関連文化財群のなかで篠山地域は源義経に関わる伝説が数多く残っていることが特色である。ここで紹介した伝説は、丹波の人々が『平家物語』等に記録された源義経の事績を、生活の一部として伝えてきた証といえることができる。

2 丹波の熊野信仰

次に『平家物語』巻第十「熊野参詣」を読んでいきたい。滅亡する平家が落ち延びていく最後の場面の一つに熊野参詣がある。

平家は、先へ進んでいくうちに日がたち、岩田川（現在の富田川）に到着した。熊野参詣には田辺からこの川にそって東に向かい、熊野古道に入ることになる。「この川の流れを

一度でも渡る者は、悪業・煩惱、過去の罪業がみな消えていくと言われている」ので、心強く思われた。

熊野三山の一つ、熊野本宮の證誠殿の御前で静かに経を唱え、お山のほうを拝むと、その尊厳さは思いもよらぬほどであり、言葉にならないくらいである。広大な慈悲の霞は熊野山にたなびき、並びなき靈験あらたかな神明は音無川に姿を現している。法華経を修行するところには神明の感応が月のように限なく照り、六根を懺悔する庭には妄想の露ひとつない。どれをとっても、来世の極楽往生が期待され、頼もしいことばかりである。

夜が更けて人が寝静まってから、平維盛が謹んで言葉を捧げると、かつて平重盛がこの御神前で「我が命を召して、後世をお助けください」と祈られたことが思い出されて感慨無量である。とくに、「この熊野権現の本地が阿弥陀如来であり、衆生を見捨てないという本願どおり、浄土へお導きください」と祈られた。とりわけ維盛が「故郷に残してきた妻子が安穩でありますように」と祈られたのは、悲しいことであった。現世を避け、仏道に入られたが、哀れにも妻子を思う妄執はまだ尽きないようであった。

夜が明けると、本宮から船に乗り、新宮へ参られた。かんのくら（神蔵、新宮の山上）神社を伏し拝めば、大岩（ごとびき岩）に松が高くそびえ、山風は迷いの夢を破り、流れる水は清く、川の波が世の穢れを洗い流しているように思えた。明日社（飛鳥神社）を礼拝し、佐野の松原通り過ぎて、那智の御山（西国三十三札所一番）に参拝した。

三重にみなぎり落ちる滝の水が、数千丈までよじ登っているようにみえ、観音の霊像は岩の上に現れて、まさに観世音菩薩の住まう

補陀落山のごとくであった。霞のたちこめている底には法華経を読誦する声が絶えず、釈尊が法華経を説いた霊鷲山ともいえる景色だった。熊野とは次のようなところであった。

抑権現当山に跡を垂させましましてよりこのかた、我朝の貴賤上下歩をはこび、かうべをかたむけ、たな心をあはせて、利生にあづからずといふ事なし。僧侶されば薨をならべ、道俗袖をつらねたり。寛和夏の比、花山の法皇十善の帝位をのがれさせ給ひて、九品の淨刹ををこなはせ給ひけん、御庵室の旧跡には、昔をしのぶとおぼしくて、老木の桜ぞさきにける。

大勢いる那智籠りの僧たちの中には、この維盛をよく見知っているものがいてく、同行の者に「そこにおられる修行者を誰かと思っていたが、小松大臣重盛殿の嫡子・三位中将維盛殿でいらっしゃる。あの方が、まだ四位少将であった安元二年（1176年）の春の頃、法住寺殿で後白河院五十歳のお祝いがあったとき、父・重盛殿は内大臣兼左大将でいらっしゃった。叔父の宗盛殿は大納言兼右大将で階（きざはし）の下に着座された。そのほか、三位中将知盛殿、頭中将重衡殿をはじめ平家一門の殿上人がめでたい日を祝い、垣代に立っておられたが、その中から、この三位中将維盛殿が桜の花をかざして青海波を舞って登場されたときは、露に媚びた花のような姿、舞を舞う袖が風に翻るさまといい、その美しさは地を照らし天も輝くほどであった。建春門院様が関白・藤原基房殿を使者として、衣をお与えになると、父の重盛殿が座を立ててこれを賜り、右の肩に掛けると、後白河法皇に拝礼をされた。比類ない名誉なことだと見えた。そばにいた公卿や殿上人もどれほど羨ましいと思ったことだろうか。

内裏の女房たちのなかには「あのお姿や舞ぶりは、まるで深山木（みやまぎ）の中の桜梅のようだ」といわれた人である。ほんの今にも大臣兼左大将を期待されていた人と思っていたのに、今日はこのようにやつれ果てたお姿となってしまうなどとは、以前には思いもよらなかった。時と共に移り変わるのが世の常とはいうものの、哀れなりことだ」といい袖を顔に押し当て、さめざめと泣くと、那智籠りの僧たちも、皆涙で僧衣の袖を濡らした。

この後の段で維盛は熊野の海に入水するのである。

さて、『平家物語』のころの熊野三山は、大峰山から本宮・新宮・那智にかけて山岳修行者が聖地として歩いて修行する山であった。それだけではなく、先の『平家物語』にあったように阿弥陀如来への信仰から、多くの皇族、貴族が参詣をした。後白河院は実に 34 回も熊野詣を行ったのである。女人禁制の時代に男性も女性も参詣できることも特色であった。やがて、室町時代になると皇族、貴族だけではなく、武士、庶民まで参詣が広がり「蟻の熊野詣」と言われるほど多くの人々が熊野詣を行ったのである。

この熊野詣を行うにあたって、祈祷や宿泊の世話をしたのが「御師」であった。「御師」は参詣者である「檀那（道者）」と師檀関係を結んだ。また、熊野三山参詣の道案内と種々の作法を参詣者に伝える「先達」があった。「先達」の姿は、那智参詣曼陀羅等に見ることができる。この熊野参詣の御師、先達、檀那に関わる古文書が熊野本宮大社、熊野那智大社に伝えられている。「檀那願文」と称される文書は、熊野参詣した檀那たちが、御師を通じて神前に参拝する際、その出自を明らか

にするために記したものであった。この文書は 14 世紀から 15 世紀にかけての熊野信仰の広がりを知ることができる貴重なものである。そのなかに丹波地域の檀那・先達に関わるものが約 40 通残されている。そのいくつかを紹介しながら、中世丹波の熊野信仰を紹介したい。

（１）竹林寺と栗作郷

まず、「諸国檀那願文帳」（熊野本宮大社文書、応安 2 年、1369 年）を検討したい。

丹波国栗作郷竹林寺先達

桜本坊（花押）檀那
井坊（花押）

金屋村下殿兩人（花押）

応安二年^{己未}三月十八日

この先達は竹林寺である。竹林寺の所在地と考えられる栗作郷は、丹波市山南町谷川に位置する。その域内で「竹林寺」にあたる寺院は、竹林山常勝寺である。後述する法道仙人開基の天台宗寺院である。所蔵の敷曼陀羅は「金剛山大宿」で入手したことを示す墨書を持つ。金剛山は葛城山系の修験寺院である。また、谷川には熊野本宮大社を分祀した熊野神社があり、この地に熊野信仰があったことがわかる。

栗作郷は、鎌倉幕府の御家人、久下氏の本拠地であった。熊野本宮大社文書にも「丹波国氷上郡栗作郷久下久元願文」（応永 15 年、1408 年）があり、久下氏が熊野本宮の檀那であったことがわかる。先の文書の「金屋村下殿」も久下氏である可能性が高い。これらのことから、栗作郷の熊野信仰は、久下氏によって支えられていたことが理解できる。

（２）福德貴寺と宮田荘

熊野那智大社の先達として複数史料が残っている寺院が福德貴寺である。永徳 2 年

(1382 年) には「福德寺」、応永 28 年 (1421 年) では「福德貴寺」とある。

宮田山福德貴寺は、法道仙人開基の天台宗の寺院である。この寺の奥の院が、篠山市栗柄にあり、不動の滝に滝宮が祀られている。熊野那智の滝に比するものであろう。また、同地には藤の宮があり、熊野に三十三度詣でた人物が藤の花を持ち帰り、神前に手向けたことから社名が付けられたという(『篠山領地志』)。さらに、寺の入り口にある石風呂(写真 1) も熊野信仰との関係があるかもしれない。この寺院でも熊野信仰の痕跡をとどめる話が伝承されていたことが理解できよう。

(3) 岩屋山石龕寺

石龕寺は岩屋寺ともいい、聖徳太子が開創したと伝える真言宗寺院である。この寺は、熊野本宮大社文書に最も多く名を残す檀那である。例えば、「丹波国石龕寺福聚院引檀那願文」(応永 25 年 1418 年) には、

丹波国氷上郡内井原庄石龕寺参詣願文事

合

遍照坊(花押) 久代了二(花押)

梶村重信(花押) 山畑景家(花押)

祐阿(花押) 兵衛五郎(花押)

から村

形部大夫

村森

形部大夫

宗貞

阿玖間

刑部大夫

おやま

掃部

玄阿

一部

左近五郎

大乗寺

奥坊(花押)

庄司二郎

右願文次第、如件

応永廿五年戊戌三月廿二日 先達 福聚院(花押)

とある。ここに見える地名は、「村森」(井原庄)「阿玖間」(味間庄)「おやま」(大山庄)と丹波市だけではなく、篠山市にも広がっている。このことから、熊野本宮大社の先達が石龕寺を一つの拠点とし、丹波の檀那を組織

化しようとしている様子をうかがうことができる。

石龕寺の周辺には、この頃の石造阿弥陀仏が数点残されている。熊野本宮大社の本地仏は阿弥陀如来である。石龕寺の檀那には阿弥陀仏号や阿号を名乗る念仏聖が含まれており、丹波の人びとは、彼らの導きによって後生安楽を願ったことが理解できる。

また、大山荘域に和泉式部の伝説が残されていることも重要である。熊野の信仰を全国に広めたのは、先達だけではなく、熊野比丘尼(熊野三山に属した僧形の女性宗教者)の存在も大きい。彼女たちは、歌によって和泉式部の伝説を伝播していったのである。熊野信仰の盛んな丹波の地に伝説として定着したのである。

以上のように、熊野本宮大社、熊野那智大社に残されている丹波の檀那についての文書から、中世丹波の地に熊野信仰が広がって居たことが理解できる。そして、神社や石造物、伝説などにその残滓を確認することができるのである。

3 法道仙人と丹波の寺々

丹波の寺院に残されている伝承でもう一つ注目できるのが、「法道仙人」の伝説である。先に述べた常勝寺や福德貴寺の開基とされる人物である。

なかでも、常勝寺で 2 月 11 日に行われる「鬼こそ」という行事では、子どもが法道仙人に扮して、鬼とともに登場する(写真 2)。兵庫県下の天台宗、真言宗の寺院の修正会の行事に「鬼踊り」「鬼追い」と呼ばれている。年頭の寺院での法会のあとに、鬼が登場し、松明を持って所作をする行事である。この鬼は、地獄の鬼や節分で追われる鬼とは異なり、仏の化身として悪しきものを追い払う役割を

する。その行事に法道仙人をとまなうのは丹波のみである。

さて、『元亨釈書』卷第十八「願雑三 神仙」の「法道仙人」の条によると、仙人は天竺の出身で、鉢を飛ばす秘法を行うことから空鉢仙人とも呼ばれていたとある。

法道仙人の伝説の中心的な寺院は、法華山一乗寺（加西市）といわれている。この仙人に記している最も古い記録は、源平の争乱の時期である養和元年（1181年）の「清水寺住僧弁忠施入状」（清水寺文書）である。清水寺は、西国二十五番札所の御嶽山清水寺（加東市）である。「右当伽藍者、往昔有一仙人、□□〔(法)〕道、ト丹州・摂州・播州三箇国之岐、草創建立」と記されている。

紙幅の関係で詳細を述べることはできないが、法道仙人の伝説も丹波の人びとの信仰を語る重要なものであるといえよう。

4 むすびにかえて

―地域資源としての歴史文化遺産―

『平家物語』を読解しながら、中世の丹波に生きた人びとの信仰の一端を紹介してきた。

ここで紹介した伝承は、史実ではないことから、歴史文化遺産と考えられることは少ない。伝統的な建造物、歴史的町並み、遺跡、城、古墳などの史跡も大切だが、伝説や昔話など丹波の地で連綿と語り伝えてきた伝承を丁寧に掘り起こし、様々な歴史的な記録と合わせて考えることで、新たな歴史の姿が見えてくる。

歴史は人に営みが積み重なった地層である。

都（中央）ほど、残された地層（歴史資料）の厚みがあり、一枚一枚丁寧に層を除いていくことによって、歴史的な変遷が明らかになり、古層も解明することができる。

それぞれの地域で当たり前のように記録さ

れ、語り継がれてきた伝説は、それぞれの地域が紡いできた歴史でもある。そのような小さなストーリーを積み重ねていくことで大きなテーマに広がっていく。

そうしたストーリーを掘り起こしていくというのは、教科書に載っている歴史だけではなく、地域ならではの歴史文化遺産（地域資源）を発見することが可能となる。ここでとりあげた信仰や伝説は、丹波の地に暮らした人びとの心の軌跡を考える大切な歴史文化遺産である。

参考文献

- ・藺田香融「法道仙人考」（『平安仏教の研究』、法蔵館、1981年）
- ・田中久夫「観音信仰と播磨の法道仙人」（『仏教民俗と祖先祭祀』、神戸女子大学東西文化研究所、1986年）
- ・『丹南町史』上巻（丹南町、1994年）
- ・久下隆史「中世後期の丹波の熊野修験について」（御影史学研究会編『民俗の歴史的世界』、岩田書院、1994年）
- ・久下隆史「大山荘の神社と信仰」（『村落祭祀と芸能』、名著出版、1989年）

表 平清盛と源平合戦関連文化財群（篠山市・丹波市）		
名称	所在地	説明
神池寺	丹波市市島町多利2609	平重盛の写経を納めた五輪塔などが寺宝としてつたわる。
笛吹山・笛の薬師	篠山市大熊	県立篠山鳳鳴高校がある丘陵一体を笛吹山と呼ぶ。源義経一行が南北二手に分かれ、北を進んでいた義経が途中この地で休息したときに笛を取り出し曲を奏でたところ、東の谷から太鼓の音がし、笛に合わせたことから「笛吹山」、笛を奏でた地の薬師如来を「笛の薬師」と呼ぶようになった。
春日神社	篠山市小枕	源義経が戦勝祈願のため奉納した鞍を保存している。
馬口池	篠山市小枕	源義経は、何時敵が襲撃しても戦えるよう、春日神社（篠山市小枕）に鞍を奉納して戦勝祈願し、近くの池で馬の口を洗い、水とカイバを与えたところから馬口池と言われている。
泉の講山（剛山）	篠山市泉	元暦元年（1184）二月、三草山に向かう源義経一行が四日泉村の南賀寺を詣でた日が寺講の日と重なり、馳走を受けて大変喜んだ。「この東の山はなんと呼ぶ？」との義経の問いに「こうやま」と答えたところ、「本日の寺講を記念して、講山と唱えよ」と言われた。以来、「講山」と呼ばれていたが、その後「剛山」に変化し現在に至っているとの伝説がある。また、義経が「心剛山」と詠んだことから剛山と呼ぶようになったとも言われる。
名無木	篠山市不来坂字宮ノ谷	丹波志の記述によれば「不来坂の手前で源義経は休息し、八幡神社に武運長久を祈願して、使っていた鞭を地面に突き刺し合戦に向かった。後日、見事に芽を吹き大木となったが、あるとき暴風によって折れた後も再び芽を出して茂った。誰もこの木の名前を知らなかったため、ななし木と呼ぶようになった」とある。現在その木の子孫が、JR古市駅前に存在する。樹種は「ハルニレ」というニレ科の落葉樹である。
鷲尾三郎義久供養塔	篠山市鷲尾	一の谷への道案内をし、その後義経に従い衣川で戦死した鷲尾良久の遺骨を出身地に送り、村人が祠を建てて祀った場所。現在は供養塔がある。
鞍懸山	篠山市小枕	義経が春日神社の前を通りかかった時、馬が立ち往生し、馬の鞍をはずして木に懸けて改めて武運を祈願した。その鞍を懸けた木があった山。神社のあった集落は、このときから駒鞍村と呼ばれるようになったとされる。
弘誓寺	篠山市宇土	榎ヶ峰の北側にある。義経が三草山に兵を進める際、榎ヶ峰の寺院に平氏の伏兵があると予想して、全坊を焼き払った。後に、再建されている。
集坂	篠山市住山	村の西にあり、義経が兵を集めた場所といわれる。
不来坂嶺	篠山市不来坂	平氏がこの坂に兵を進めていると源氏側は予想していたが、来ていなかったのも、「平氏不来坂」と呼ぶようになり、地名となったといわれる。
会峰	篠山市今田町	四斗谷・黒石 義経がここで兵を集めたので、「会峰」と呼ぶようになった山。
腰掛石	篠山市今田町今田	水無峠にある石で、義経が三草山へ向かう途中、小休止して腰掛けたといわれる石。
只越	篠山市今田町市原	義経が小野原の人家に火を放って三草山に向かったといわれる地。伝承では、義経が「ただやすやす」と越えたので只越と呼ぶようになったという。
和田寺	篠山市今田町小野原	田代冠者信綱の進言を受けて、三草山の平氏の陣に夜襲をかけるために、進軍の明かりに小野原の民家や山野に火を放った地。寺所有の縁起に、兵乱で焼失したことが書かれており、時期から判断すると、三草山の戦いを指している。
誓願寺	篠山市魚屋町45	「源平合戦之図」「六枚折屏風二双」などが保管されている。源平合戦の山の戦い／海の戦いが、一雙づつ描かれている。
龍蔵寺	篠山市真南条上1474	寿永二（1183）年木曾義仲が西走する平氏勢を討討した兵乱により焼失。文治五年（1189）再建された。

兵庫県教育委員会『平清盛と源平合戦関連文化財群の調査研究』（2012）



写真1 福德貴寺の石風呂（1999年撮影）



写真2 常勝寺「鬼こそ」（1999年撮影）

(2) 現地見学と講義

達身寺の歴史について

達身寺住職 渡邊 健臣

達身寺には古文書がなく前身はよく解っていない。寺伝によると、世が戦国の時代であった頃、達身寺は、僧兵を抱え山岳仏教の教権を張るような大寺院であったと言われている。織田信長が丹波平定を行った際、家臣である明智光秀が丹波の地を攻め、保月城（現、丹波市春日町）が攻められた。当時、達身寺は保月城に加勢をしていたと言われており、そのことで保月城よりも早く寺院が焼かれてしまった。僧侶たちは寺院を焼かれる前に、仏像を近くの谷へ運び出したのだが、そのまま長い年月置き去りにされてしまうことになったと伝えられている。

元禄 8 年（1695 年）この村に疫病が流行り、多くの人々が亡くなった。その原因を当時の村人が占い師に占ってもらったところ、「三宝を犯した仏罰である。」と言われた。村人たちは、山に登り放置されたままであった仏像を集め、破損していた達身堂を、現在の地に移し修繕を行った後、仏像を安置し奉ったそうである。

修復 20 年後に禅宗の曹洞宗のお寺となり、達身寺という名がついた。

達身寺の名の由来は定かではない。また、達身寺の仏像には謎が多く、行基菩薩が仏教を広めるために、霊木から仏像を作り出したという霊木説に始まり、明智光秀の丹波攻めの際、各地の戦火から非難させるために、当寺へ仏像が運び込まれたという客仏説。また、一寺に一軀あればよいとされる、本尊仏や兜跋毘沙門天が数多くあり、そして、それらの



数体が未完成であることから、過去に仏像を作っていたという工房説がある。また、当時の丹波の地に仏師を輩出していたお寺が達身の他になかったことから、丹波仏師快慶が当寺と深い関わりがあったのではないかとする説もある。



(2) 現地見学と講義

達身寺木彫仏群について

京都造形芸術大学

非常勤講師 杉崎 貴英



はじめに

戦後まもない頃、東京で学んでいた若き研究者がいた。あるとき彼は、古美術収集家の藤田青花から魅力ある土産話を聞く。後年の回顧から引用しよう。

藤田氏が達身寺を訪れて帰った直後に伺ったことがある。丹波達身寺の小さなお堂の中には、所狭しと大小の仏像が並び、とくに多数の一木造の兜跋毘沙門天が、建物の梁の上までぎっしりと並んでいるということであった。藤田氏の語り口のなかには、宝島へ渡って帰ってきた直後の人のような、高揚した気分を感じとれた [文献①]。

いま「丹波の正倉院」と称され、遠方からも拝観者が訪れる達身寺は、仏像の宝庫として、また兜跋毘沙門天という特殊な像が多く残る場所として、早くから全国的にも知る人ぞ知る存在となっていたようだ。謎に満ちた木彫群について、最近の調査研究にも触れつつ述べてみたい。

1 木彫仏群の全体像

いま木彫仏群は、本堂裏手の建物（宝物殿 1）と、同じく左手奥の小高い段上に建つ鉄筋コンクリート造の建物（宝物殿 2、別掲の配置図を参照）にそのほとんどが保管され、さらに本堂内と、本堂右手に建つ毘沙門堂にも安置されている。

文化財指定の区分でいえば、宝物殿 2 の正面中央に坐す巨大な木造阿弥陀如来坐像（達身寺旧本尊）をはじめとする国指定重要文化

財 12 躯 [文献②]、各所に分かれて安置される兵庫県指定文化財「木造仏像類」34 躯 [文献③]、さらに「木彫仏像及木彫仏断片 167 点」(33 躯+断片 134 点) [文献④] となり、計 79 躯が像としての姿をとどめている。

木彫仏が一箇所に多数残される例として、ならび称されているのが福知山市指定文化財 122 躯である。日本海側では正楽寺（高浜町）の 23 躯があり、それぞれ兜跋毘沙門天像 4 躯を含む。最近では加東市の薬師堂から 60 躯の発見が報じられたが、兜跋毘沙門天像については知られない。達身寺では 79 躯のうち兜跋毘沙門天が実に 15 躯を数え、いかにも突出した多さといえる。

さらに達身寺の周辺に、作風上の共通点をもつ仏像が知られている。近くの地藏堂（氷上町三方）に伝えられてきた仏像群 21 躯（丹波市指定文化財）[文献④] で、兜跋毘沙門天は 5 躯含まれているといい、詳しい調査と達身寺の像との比較検討が待たれる。

なお寛政 6 年（1794）の『丹波志』達身寺の項には、本尊阿弥陀如来座像はじめ 5 躯のほか「古仏、六尺より二尺五寸までの像百余躯これあり」と記され、さかのぼって文禄 4 年（1595）に「木像の数百十五躯」と記した史料もあるという [文献⑤]。これらの数字は必ずしも信用できないが、現状を上回る数が残されていたことは疑いあるまい。

所望にこたえて旅立った像もあったようだ。文化 15 年（1818）、遠く讃岐国（香川県）

の仏生山法然寺（高松市、浄土宗）に 3 軀、鰐河神社（三木町）の別当寺であった応神寺（廃寺）に 3 軀、世尊院（三谷寺〔飯山町、真言宗〕か）に 4 軀の、計 10 軀が譲渡されたことを伝える古文書が知られている。また近隣では三如来寺（氷上町香良、のち円通寺〔氷上町御油〕に合併）に釈迦如来坐像が寄附されたという〔文献⑤〕。これらの消息は未詳だが、2000 年秋、達身寺伝来という木造菩薩立像が大倉集古館「拈華微笑」展に貸し出されて公開され、【15】の聖観音立像との類似が説かれており注目される。かつて転出した像の現存が明らかになることを今後に期待したい。

2 達身寺とその前身寺院

達身寺の詳しい寺史はよくわかっていない。仏堂の存在を明記する記録としては、最も古いものでも天正 15 年(1587)・文禄 4 年(1595)の古文書にみえる「達身堂」「たるミ堂」「高御堂」までくだってしまう。その当時は背後の山中に仏堂があったのだが、元禄 8 年(1695)に至って「たるみ堂」を解体し、その部材で造営したのが現在の本堂であるとされる。現在の達身寺の前身は山の寺（山林寺院）として把握できよう。

近年、かつては背後の山にあったのがのちに山麓に移ったという伝承をもつ寺院について「里山系寺院」という呼称が提唱された〔文献⑥〕。また、里に近い山の中腹や尾根筋に営まれた古代の山林寺院について「里の山の信仰空間」という視点が提唱され、それらは国府の周辺や郡境・国境に営まれた例が多いことが説かれている〔文献⑦〕。達身寺の場合、丹波国府からは遠いものの、旧丹波国と旧播磨国との国境に近い。

昭和 35～39 年(1960～64)、甲南大学古美術研究会が行った達身寺仏像調査〔文献⑤〕の過程で山中の踏査がなされている〔文献⑧〕。詳細な報告でないのが惜しまれるが、「たるみ堂」の旧跡とされる地点から「一直線にほぼ並ぶ礎石」が検出されたといい、別に「堂場」と称される平場があるという。「堂場」とは、里山系寺院にしばしば例をみる旧地の呼称である。今後の考古学的調査に期待を寄せておきたいが、前身寺院を考えるためにも、木彫仏群がいつつくられたのかが問題となろう。

3 木彫仏群をみる（その 1）一年代と表現

79 軀のうち、ただひとつ制作年代が明記されているのが【11】の薬師如来坐像だ。像内墨書銘に「建久三年^{歳次壬子}十月一日／三宅安次女私市氏子／三宅安則女神氏子」とあり、鎌倉時代のごく初期、1192 年の制作とわかる。同じ頃に兵庫県内でつくられた仏像としては、浄土寺（小野市）の快慶作阿弥陀三尊像（国宝、1195 年頃）が名高い。木彫仏群のほとんどは、これに先立つ平安時代につくられた。

平安時代とひとくちにいっても、約 400 年間のなかで仏像の表現は大きく変わっている。都の仏像の移り変わりを大ざっぱに言えば、前期にはボリューム感たっぷりで彫りが深い表現が好まれ、後期になると、目鼻立ちや着衣の襷（衣文）の彫りが浅く、奥行きや見た目の重量感をおさえた表現が好まれた。構造では、像の根幹をなす頭や胴体の部分をできるだけ一本の木からつくる一木造にこだわる時代から、複数の木材を組み合わせて根幹部分をつくる寄木造を適宜もちいる時代へ移り変わってゆく。後期の目印となる有名な仏像を挙げておこう。平等院鳳凰堂の阿弥陀如来坐像（1053 年、国宝）は、座高で約 2m 半の

大きさをもつが、奥行きも彫りの深さもできるだけ抑え、見た目の重量感をそぎおとしている。これを制作した仏師定朝の完成させた表現「定朝様」は一世を風靡して、都では鎌倉時代になっても影響を与えつづけた。9～10世紀には個性ある仏像もまみられたのが、定朝様が成立するや、それは寄木造とともに地方にも波及していったのである。

達身寺にも、定朝様の影響を受けたものがある。いくつかある。まず最大の大きさをもつ【12】の阿弥陀如来坐像と、【13】の十一面観音坐像をみよう。いずれも寄木造で、目鼻立ちの形やその比率、彫りの浅い衣文（【12】に当初の表現がよく残る）も、定朝様が基調となっていることを示す。また【14】の地藏菩薩坐像は、顔立ちや、少しいかり肩である点、細かいところでは耳の形など、【12】【13】との共通性をもつ。制作年代は平安時代も末期と考えられているが、江戸時代の修理の際の仕上げで覆われている【12】【13】に比べ、【14】は当時の表現をよくうかがうことができる。

もう一躯の阿弥陀如来像【9】は【12】と同じポーズだが、肩のラインや奥行きの浅さはより都の定朝様仏像に近い。しかし木目を観察すると、像の根幹はもちろん、両腕の肘までが同じ材からできていることがわかる。できるだけ一本の木からつくろうとしたわけで、その点では古くからの伝統性をもつ。これらの像をつくった仏師は、定朝様の影響を受けながらも、都の仏師との関係が近くはなかったことを示している。

それでは最も古い像はどれだろうか。ひときわ彫りが深く大ぶりの目鼻立ちをもち、堂々たる量感を誇る一木造の像、つまり【10】薬師如来坐像に求められる。個性豊かな表現は、79 軀のなかでもとくに目をひく。都の仏

像との比較は簡単ではないが、制作年代は9世紀から10世紀に求める意見が多い。さらに8世紀つまり奈良時代にまでさかのぼらせる意見もある〔文献①〕。右耳の後ろには大きな節があり、何か特別な由緒のある木があえて用材に選ばれたことを物語っているようである。

厳しさをこめた目鼻立ちが非常によく似ているのが【2】の菩薩立像で、【10】との密接な関係を考えさせる。肩から脚にかけてまとう天衣（ショール）が身体から浮き上がる部分までも同じ木からつくっており、できるだけ一本の木から彫りだそうとする強い意識がみられる。腰をひねり、やや顔を向かって左に向けていることからすれば、あるいはかつてこれと対称的なポーズをとるもう一躯の像があつて、薬師三尊像を構成していたのかもしれない。

【2】にみられるような、お腹が丸々と突き出すように表現される点は、【15】【16】【17】【18】など他の像にもみることができる。甲南大学古美術研究会の調査で「達身寺様式」と名づけられた特徴である。またこれらの像は、【2】とは同一の作者とは思われないものの、脚部の着衣の表現など共通する点が多い。鬘の毛が耳の半ばで渦を巻く点もその一つで、それは毘沙門天像の一部にもみることができる。【15】などにみられる円筒形の宝冠からしても、これらの年代は10世紀を中心にとらえることができよう。

4 木彫仏群をみる（その2）

一像の種類と役割

達身寺木彫仏群のなかでも、【10】の薬師如来坐像や、【16】【17】【18】と3軀も並ぶ十一面観音立像は古い段階に位置づけられた。

このことは、達身寺前身寺院を考える上で手がかりとなるのではないか。近年の研究では、郡境・国境に位置する古代の山林寺院において薬師如来や十一面観音が重視され、それらを本尊とした儀礼が行われた可能性が説かれている〔文献⑦〕。いま、現世利益の仏として信仰される薬師と十一面観音だが、古代では疫病消除の功德にも大きな期待が寄せられていた。境界の地の山上に立つ達身寺前身寺院でも、地域内への悪疫侵入を防ごうとする宗教活動が行われた可能性が想定できよう。

薬師如来や十一面観音におくれて、そうした功德への期待が高まったのが毘沙門天だった。両足を地天女が支える、この姿の毘沙門天像は、北は岩手から南は大分まで各地に分布しており、地域の境界を護る性格が説かれている〔文献⑨〕。達身寺木彫仏群の最大の特徴をなす毘跋毘沙門天の群像も、こうした視点から解釈できそうである。

なお、平安京の羅城門楼上には毘跋毘沙門天が安置されていたといい、東寺に現存する唐時代の像(国宝)がそれにあたるとされる。江戸時代には毘跋毘沙門天といえはこの像が最も著名だったらしい。達身寺の毘跋毘沙門天像のうち1軀は毘沙門堂に安置されるが、江戸時代に東寺の像を真似て両腕が補作されている。ただしこの1軀を含めて、達身寺の場合は、比叡山にかつてあった像の系譜に属する〔文献⑩〕。曹洞宗寺院としての再興以前は真言宗だったという伝えもあるが、前身寺院は天台系統の影響をより強く受けていたのではないか。

達身寺の15軀のうち、古い段階に属する【3】【7】は兜を着けるが、それよりあとに制作された【21】【22】【23】などは冠を着け、その正面に翼をひろげた鳥をあらわしている。

中国以来、毘跋毘沙門天の多くに見られる特徴だが、古来日本では鳥は悪疫をはらう呪力をもつとされた。このことから、とくに毘跋毘沙門天には、境界の地における疫病消除の功德が期待されたと論じられている〔文献⑪〕。達身寺には、宝冠の鳥を他に例をみない大きさで彫りあらわすものがあり、そうした役割を担っていたことは明らかだろう。

現存の15軀はおおよそ10～11世紀にかけて制作されていたものとみられるが、やがて毘跋毘沙門天信仰は全国的に退潮していく。それからの達身寺で造立された巨像が【12】の阿弥陀如来坐像であった。これとよく似た作風の像が国境の山の向こうに伝わっていること(多可町〔旧加美町〕専浄寺本尊、〔文献⑫〕)も含めて、前身寺院の性格変化を暗示しているのかもしれない。

5 丹波の人びとと達身寺木彫仏群

木彫仏群が守り伝えられた歩みにも目を向けておきたい。宝暦8年(1758)、第4世住持の東禅は、朝に暮に拝礼する「堂中の数多くの仏像」の激しい傷みを「最も見るに忍びず」、庄屋の足立氏とはかり、再興を決意する。村々を「周回して募化」する東禅にこたえて、「氷上一郡の村落」から寄進が集まった。かくして修復されたのが、宝物殿2の中央に並ぶ、金箔と漆塗りが鮮やかな3軀である。

明治43年(1910)、男爵九鬼隆一が氷上に来郡した。官僚として文化財行政に関わった九鬼は三田の出身で、丹波にも縁が深い。これを機に達身寺木彫群の保護が提言され、早速翌年、古社寺保存法により12軀が国宝に指定される(戦後は法改正で重要文化財に移行)。数年後、木彫仏群を初めて学術誌に紹介したのは、のちに柏原町長をつとめた藤井節太郎

であった。

大正 14 年（1925）頃、時の住職山田義亮師は、木彫仏群を保護するための仏堂建設を発願する。本堂に懸かる額「稲麻殿」は、そのために永平寺管長により揮毫されたものだ。建築家伊藤正文設計の「国宝仏陳列館」〔文献⑬〕は幻に終わったが、義亮師が名づけたという「丹波の正倉院」は、現在におよぶ達身寺の愛称となった。

昭和 53 年（1978）に至り、郷土史家船越昌氏（春日町在住）が「丹波仏所」説を提唱する〔文献⑭〕。やがて「消えた仏師の里」という観光キャッチフレーズも生んだように、それは達身寺の新たな引力となった。中松弘子氏（氷上町出身）は、船越説から着想した創作『達身寺花曼陀羅』（2002 年）を上梓している。木彫仏群は丹波の人びとによって守られ、その魅力が発信されてきたといえよう。

おわりに——木彫仏群研究のこれから

2011 年、達身寺木彫仏群への新たなアプローチが起動した。大手前大学史学研究所が私立大学戦略的研究基盤形成支援事業による研究プロジェクト「情報化による歴史文化遺産の調査研究と保存活用の新手法」の一環として開始したもので、甲南大学古美術研究会による調査以来、実に約 50 年ぶりの総合的調査となった。高精細デジタルカメラによる写真撮影に加え、特筆しておきたいのは三次元計測である。ハンディスキャナーから発せられるレーザー光は、1 軀ずつを立体的データとして記録すると同時に、新たな造形的魅力をも引き出しているように思われる。調査の成果は今後公刊の運びとなる予定だが、達身寺木彫仏群がより深く再認識される契機となることを願っている。

【参考文献】

- ①井上正「兵庫・達身寺仏像群」
（『日本美術工芸』613、1989 年）
- ②『仏像集成』第 7 卷（学生社、1997 年）
〔執筆＝神戸佳文〕
- ③『兵庫県文化財調査報告書』
（兵庫県社会文化協会、1975 年）
- ④『氷上郡の文化財』
（氷上郡教育委員会、1989 年）
- ⑤武田利啓「達身寺の文化財」
（『甲南大学文学会論集』31、1966 年）
- ⑥牛山佳幸「信濃における里山系寺院の成立と展開」
（『信濃』62-12・63-2、2010・11 年）
- ⑦久保智康「国府をめぐる山林寺院の展開」
（『国宝と歴史の旅』3、1999 年）
- ⑧古美術研究会有志「達身寺本格調査報告」
（『古苑』60、1963 年）
- ⑨むしゃこうじ・みのる『地方仏』
（法政大学出版局、1980 年）
- ⑩たなかしげひさ「鳥冠を頂く地天毘沙門の年代と系統」（『仏教芸術』63、1966 年）
- ⑪『若狭の古寺 正楽寺の仏像』
（佛教大学宗教文化ミュージアム、2009 年）
〔執筆＝近藤謙〕
- ⑫『加美町の仏像』
（加美町教育委員会、2001 年）
〔執筆＝神戸佳文〕
- ⑬伊藤正文『社寺美の新構成』
（芸苑社、1930 年）
- ⑭船越昌『丹波 達身寺 木彫仏像の原郷』
（保育社、1984 年）
〔付記〕講座当日は、時間と動線の都合からごく概要のみの口述にとどめた。本稿では再構成の上、大幅に内容を増補したことをお断りしておきたい。



【13】十一面観音坐像 【12】阿弥陀如来坐像 【11】薬師如来坐像



十一面観音立像（左から【18】【17】【16】）



【10】薬師如来坐像



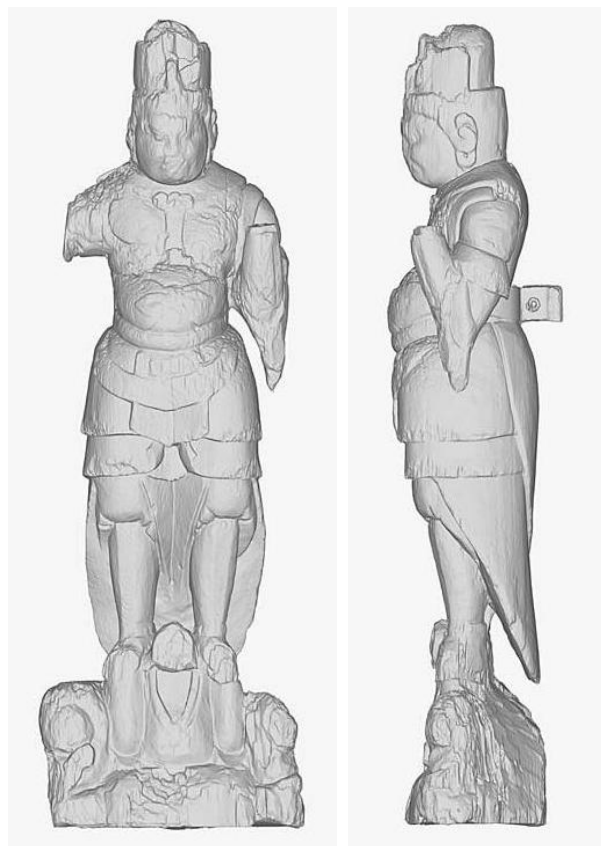
宝物殿1 正面壇上にならぶ31 軀の木彫仏群



兜跋毘沙門天像の宝冠にあらわされた鳥形
（左：【22】、右：【21】）



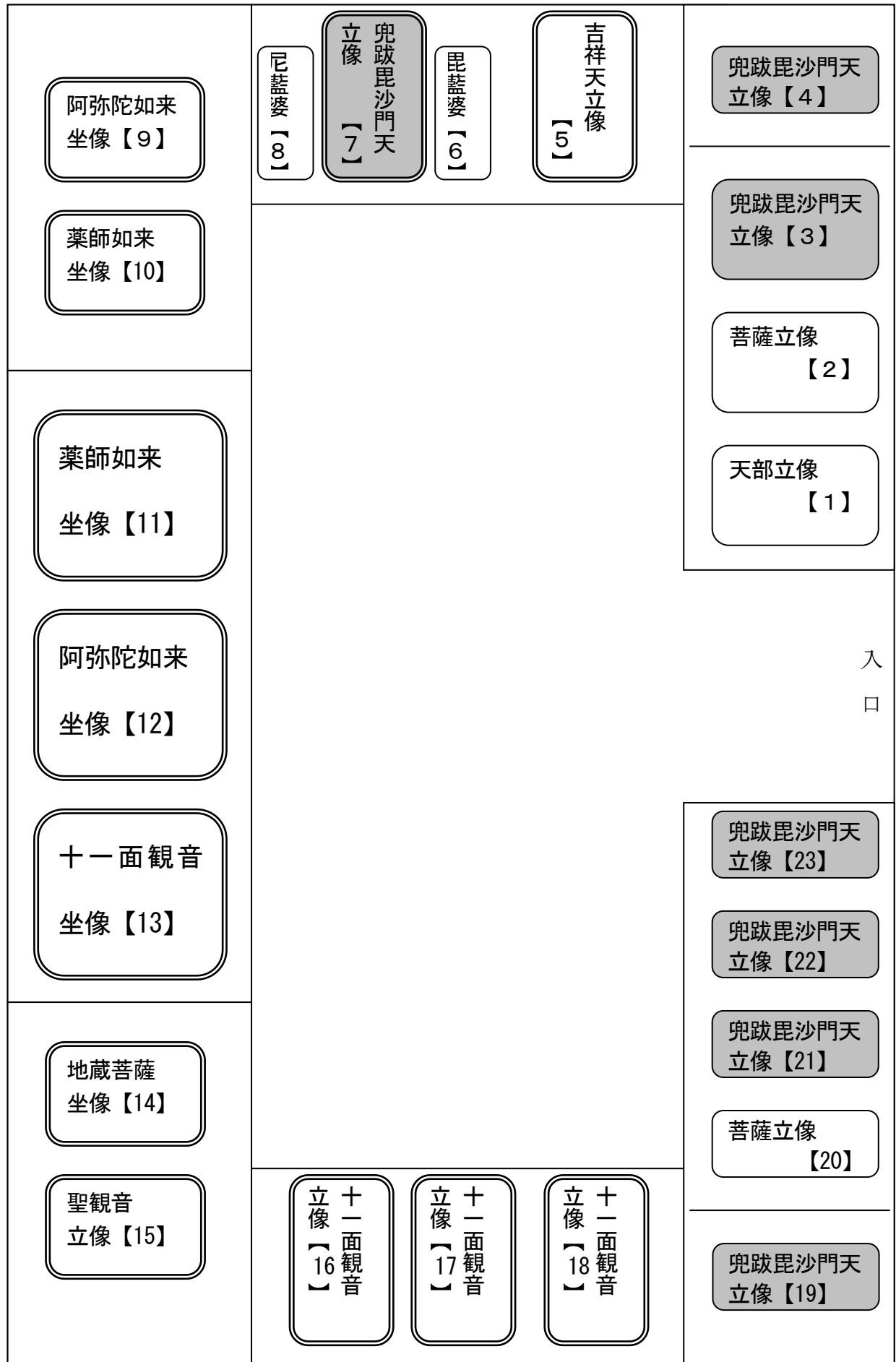
三次元計測（大手前大学 岡本篤志氏）



兜跋毘沙門天像（宝物殿1 所在）の三次元画像より

達身寺 宝物殿 2 配置図

※二重線の枠は国指定重要文化財、その他は兵庫県指定文化財を示す。



(3) 中世に生きる女たち ～昔と今の「家」の変化の中で～

石川県立歴史博物館

館長 脇田 晴子



1 はじめに

「家」の成立＝嫁取婚による夫婦が単位となる「家」の成立

「家」「家庭」は崩壊するか？－歴史的に出来たものは歴史的に消える－

「家」に閉じ込められる－「家」の変化を度外視

「家の中での仕事や母性の貢献をいって満足している女性史とは決別したい」？

2 現代の「家庭」と中世の「家」の違い

「家」＝夫婦が中心＝中世：妻問婚・婿取婚＝親子中心＝古代

前近代の「家」－生産－行政＝摂関家政所、武士団＝惣領制（血縁集団を中核）－企業の単位＝家内工業、家族経営－家内を統括する妻、代行の乳母・老女－重要－労働力の再生産＝近代・現代の「家庭」

「家」の成立＝家父長権の成立＝妻の従属の図式に疑問－身分差の方が大きい

3 家政の範囲と女性の役割－日本の貴婦

人は書をよくする－ルイス・フロイス

武士の妻－衣食住・興販・吏幹・武具の手入れ・従者の慰労－北条政子・北政所ねね

宮廷の勾当内侍－天皇家の総務・庶務・経理・廷臣勤務の掌握・年中行事の手配・官位昇進の要望の取次・訴訟などの奏請伝宣－女房奉書－事務局長格

宮家の家務執行－奉書の執筆、摂関家－宣旨局、将軍家－女房文

三条西家－家婦が取り仕切る

農村の女性－狂言「法師が母」－農事、野草摘み、機織り裁縫

町の女性－夫婦を中心とする家族と従属労働力による経営「布一尺も得売らいで」

4 母性尊重思想と罪業観－母性愛の深化

－母子一体観

母性尊重思想－澄憲・慈円－「家」の後継者を産む母性の尊重

罪業観・墮地獄－沙石集・目連草子－如法経・血盆経

「庭の教え」阿仏尼？能楽「百万」

女人禁制－結界破り－東大寺・竹生島＝弁財天－女神－神道集の神々

「婦唱夫随」「家」を中心とする小宇宙

「夫婦男女の語らいを守る神」－貴船社－敬愛の祭り（沙石集）－祈雨の神

「荒膚を戒める神」「産神」産婆＝桂女

(4) 平清盛の闘い ―幻の中世国家

京都大学大学院

教授 元木 泰雄



はじめに

丹波市に来たのは 20 年ほど前、この柏原の八幡宮、織田家の墓所などを訪ねたことが懐かしく思い出される。さて、今年は大河ドラマの関係で平清盛の話をするが、肝心のドラマの方は、清盛があまりに単純で粗暴な人物に描かれており、しかもその歴史的役割も十分に説明されていない。これでは主人公に共感もてず、ドラマの人气が今一つとなるのも当然である。

今回の講演では、清盛という人物はどういう生涯をたどり、どういう歴史的役割を果たしたのか、どこに彼の凄さ、素晴らしさがあるのかということをお話したいと思う。

まず、かれの経歴を年譜によってご紹介することにしたい。

平清盛は 1118 年に生まれ、1181 年に死去した。享年は 64。彼の生涯は 3 つの段階に分けることができる。今日の講演もこの区分に沿って進めてゆきたい。

・院近臣・武士の第一人者としての清盛

- 1118 年 生誕。白河院政期。祖父正盛は備前守、父忠盛は伯耆守。
- 1153 年 父忠盛死去。平氏の家督継承。清盛三六歳。
- 1156 年 保元の乱で勝利。播磨守に就任。
- 1159 年 平治の乱で勝利。藤原信頼、河内源氏壊滅、国家的軍事警察権を独占。

・後白河と協調、国家権力の一翼を担う

- 1166 年 摂関家領押領事件。
内大臣昇進。
- 1167 年 太政大臣昇進。
- 1169 年 福原に隠居。日宋貿易本格化。
- 1171 年 娘徳子、高倉天皇に入内。
- ・後白河院と対立、平氏政権を樹立
- 1177 年 鹿ヶ谷事件。後白河と衝突、
院近臣藤原成親・西光を殺害。
- 1179 年 治承三年政変。後白河院政を
停止。平氏政権を樹立。
- 1180 年 安德即位。以仁王挙兵鎮圧。
強引な福原遷都、頼朝挙兵、
南都焼き討ち。
- 1181 年 治承五年閏二月四日、熱病の
ために死去。六四歳。

一、清盛の生まれた時代

―院政期の特色

1. 院政の特色

清盛が生まれたのは白河院政期である。院政は退位した天皇である院（上皇、出家して法皇）が行う政治で、白河院が創始した。院政の開始は白河が皇子堀河天皇に譲位した 1086 年とされるが、本格化するのは堀河が早世し孫で幼少の鳥羽天皇が即位した 1106 年である。以後、院は天皇に対する人事権を背景に専制的な政治を行うことになる。

院政の大きな特色は自由な政治という点にある。白河、続く鳥羽院は思いの通りに荘園を獲得し、中世天皇家の経済基盤を築いた。

また後述する信西のように、身分が低い学者を政治の中心に起用するという人材登用も行っている。

2. 権力の分裂

白河院の専制政治を象徴する有名な逸話に「天下三不如意」がある。院は鴨川の水、賽の目、山法師の三つ以外はすべて思う通りになったというのである。しかし、山法師、すなわち延暦寺の悪僧が統制できないことは重大な意味をもっていた。彼らは宗教的権威を背景に再三強訴を繰り返し、院を悩ましたが、その背景には延暦寺領荘園をめぐる朝廷との衝突があった。

当時、有力な寺社や院・摂関家等は荘園を集めて独自の経済基盤としており、荘園をめぐる相互に対立する側面もあった。強訴のような非和解的な衝突が勃発するようになると、解決には暴力が必要となり、武士が政治の中心に登場することになる。院は伊勢平氏をはじめとする武士を北面として起用し、強訴の防御を担当させた。

また荘園の年貢徴収にも武士は必要で、院や摂関家等の荘園領主は武士との結びつきを強めた。河内源氏は摂関家に組織されることになる。

3. 兵乱の勃発

院政の大きな問題は、後継者の決定が院の恣意に委ねられたことで、鳥羽院の下で崇徳上皇と後白河天皇の深刻な対立が発生した。また摂関家でも、後継者問題から内紛がおり、伝統的な摂関家勢力と新興の院近臣との対立は政情を不安定なものとし、1156年に鳥羽院死去をきっかけとして、ついに平安京で初めての兵乱保元の乱が勃発することになる。清盛の活躍は後述にゆだね、以下では清盛登場までの伊勢平氏を紹介し、ついで清盛の生

涯を辿ることにしたい。

二、清盛の躍進

1. 伊勢平氏の成立（①伊勢平氏系図挿入）

清盛は、桓武天皇の子孫桓武平氏の中で、伊勢を拠点とした伊勢平氏に属した。桓武天皇の曾孫高望王が臣下に下り平高望を名乗ったのが平氏の始まりである。天皇から隔たり、親王になれない皇族が王で、王以上で構成される集団を当時「王家」（王氏）と称した。姓は臣下を区別するもので、姓を名乗るのは皇族から離脱したことを意味する。

高望は九世紀末に東国に下り混乱を鎮圧する。孫将門が大規模な反乱を起こし伯父国香を殺すが、その子貞盛が将門を討伐し武士としての名声を確立した。その子維衡は伊勢に拠点を築き、伊勢平氏の祖となって藤原道長のころの京で活躍する。しかし、一族の内紛などで政治的地位は低落した。平忠常の乱を鎮めた源頼信の子孫河内源氏が、頼義・義家と東国・奥羽で活躍、政治的地位を上昇させたのと対照的であった。（②河内源氏系図）

しかし、その河内源氏と伊勢平氏の地位を逆転させる事件が起こる。清盛の祖父正盛が義家の嫡男義親を追討するのである。

2. 祖父正盛・父忠盛

維衡の曾孫正盛は、1108年、出雲国で反乱を起こした源義親を短期間で鎮圧し、京における武士の第一人者となった。彼は白河院の北面の武士となり、強訴の防御のほか、海賊追討などに活躍して伊勢平氏を発展させた。

その子忠盛は、受領を歴任して院に莫大な経済奉仕を行い、ついに昇殿を許され、殿上人となった。貴族社会は、位階によって公卿（一位～三位）、諸大夫（四～五位）、侍（六位以下）に区分される。天皇の住居清涼殿の殿上間に入ることを許されるのが昇殿である。

公卿は全員この資格を有するが、諸大夫では特に功績のあった者のみが許されており、大変な名誉を意味した。忠盛の急速な躍進を貴族たちが妬んだことは、『平家物語』の「殿上闇打」に描かれている通りである。なお侍というのは、貴族社会における六位以下の階層を示す言葉で、当時は武士と同義ではなかった。

忠盛は 1153 年、58 才で死去する。当時、清盛はすでに三六歳の壮年であった。

3. 保元の乱 (③保元の乱関係系図挿入)

1155 年、鳥羽院は死去した近衛天皇の後継者として後白河天皇を選んだ。崇徳院は天皇家嫡流でありながら皇子重仁が皇位を逸したことに不満をもった。鎌倉時代の説話集『古事談』は、鳥羽院が崇徳を白河院の落胤として嫌悪したとするが、後述のように事実とは考え難い。後白河の乳母夫院近臣信西の謀略の可能性もある。

一方、摂関家では、関白忠通が実子誕生を機に、養子で弟の頼長に対する関白譲渡を拒否し、父忠実に義絶された。この結果、頼長が摂関家の中心となり、莫大な財産・武力を掌握した。一方、忠通は信西と手を組んだ。その信西は近衛天皇死去を利用し、頼長が天皇を呪詛としたという噂を流し失脚させたのである。

そして 1156 年に鳥羽院が死去すると、信西は後白河天皇の命令と称していち早く武力を集め、院の葬送の混乱を利用して崇徳・頼長を挑発し、挙兵に追い込んだのである。

この時、平氏では清盛の叔父忠正が頼長に従ったが、彼は以前から頼長の腹心であった。一方、忠盛の正室藤原宗子（池禅尼）は崇徳の皇子重仁の乳母であったから、その子で清盛の異母弟頼盛は崇徳に従うべき立場にあり、

一門分裂は確実とみられた。しかし、宗子は頼盛に清盛に味方することを命じ、分裂を回避した。院近臣の中心忠盛の室が乳母となったことは、重仁が重視されており、鳥羽は本来崇徳の系統を排除していなかったことを示す。

合戦は、源義朝の活躍で後白河天皇側が勝利した。清盛は播磨守、弟頼盛・教盛も昇殿という手厚い恩賞を与えられたが、義朝も五位でありながら、通常四位以上に許される左馬頭・昇殿という破格の恩賞を与えられた。彼が冷遇されたとするのは俗説である。

4. 平治の乱

保元の乱後、政治の実権を握ったのは信西であった。有能ではあったが、あまりの権勢が反発を招き、院近臣藤原信頼と義朝によって殺害された。この時、清盛は熊野参詣の途中にあり窮地に陥ったが、紀伊の武士たちの協力もあって無事に入京した。

清盛は帰京するや信頼に反発する勢力と提携し、信頼が幽閉していた二条天皇（後白河の皇子）・後白河上皇を自邸の六波羅に移し官軍となった。清盛は、賊軍に転落し脱落者も相次いだ義朝軍を六波羅に迎え撃ち、圧勝した。

降伏した信頼には死刑、東国に逃走を図った義朝には暗殺の運命が待っていた。頼朝の嫡男頼朝が、清盛の継母池禅尼の嘆願で助命されたことは有名だが、この背景には頼朝を寵愛した後白河の姉上西門院の圧力があったと考えられている。

三、後白河との協調

1. 清盛の勝利

平治の乱の結果、対立する武門が消滅し、清盛は国家的な軍事警察権を独占した。そして、当時の天皇・院・摂関家もすべて清盛の

武力を頼ることになる。しかし、清盛が独自に組織した武力は伊賀・伊勢の武士団等限られており、大規模な武士の動員には院や天皇の命令が不可欠で、独自の御家人組織をもった鎌倉幕府とは大きく異なっていた。このため、当時の清盛にはまだ一人で政治を動かすだけに力はなかった。

2. 皇胤清盛

1166 年、清盛の娘婿であった摂政藤原基実が死去した。摂政は弟基房が継承するが、莫大な摂関家領は、強引に後家となった清盛の娘盛子が継承することとし、実質的に清盛が奪取するに至った。これを献策したのは摂関家の家司藤原邦綱だが、後白河院もこれを容認した。

ついで後白河は清盛を内大臣に昇進させた。大臣家以上の家柄でない者の大臣昇進は、外戚・皇胤等に限定されていた。父は受領に過ぎず、外戚でもない清盛が大臣に昇進できた背景には、清盛を白河院の落胤とする説が関係し、昇進はその公認を意味したのである。翌 1167 年、清盛は太政大臣に昇進する。

なお、彼の母とみられる忠盛の最初の室は、かつて白河院に仕えていたとされるから、清盛が白河院の落胤である可能性はかなり高いとみられる。なお、『平家物語』が清盛の母とする祇園女御は実在の人物だが、忠盛に嫁ぐことはなかった。

3. 後白河との協調（系図・平氏・天皇家関係系図）

後白河院が清盛を優遇したのは、自身の院政確立のために清盛の協力が必要だったためである。1168 年、両者は後白河と清盛の義妹平滋子との間に生まれた高倉天皇を即位させ、政治的に提携した。

清盛は摂津国福原の別荘に居住し、近隣の

大輪田泊で日宋貿易を開始した。後白河も同地を訪れ、天皇家の禁を破って宋商人と対面している。貴族社会の迷信を乗越え、大胆な貿易を行った点に両者の開明的な性格が窺われる。

1171 年には清盛の娘徳子が高倉天皇の中宮となり、両者の協調は頂点に達した。しかし、次第に両者は政治の主導権をめぐり対立を深めることになる。

四、平氏政権の成立

1. 鹿ヶ谷事件

1176 年、後白河と清盛の調整役建春門院（平滋子）が死去すると、両者の対立が激化し、藤原成親以下の院近臣と平氏一門が官位をめぐって衝突した。その翌年、延暦寺が院近臣に対する強訴を惹起し、清盛の長男重盛が防御に失敗したため、院近臣は配流を余儀なくされた。怒った後白河は理不尽にも天台座主明雲の配流を命ずるが、延暦寺の悪僧に奪回されてしまう。ついに後白河は清盛に延暦寺攻撃を命ずるに至った。

しかし、突如清盛は院近臣の成親、義弟西光らを捕らえて殺害した。背景には後白河も加わった清盛暗殺計画が存したのである。『平家物語』は院・院近臣の謀議の場所から、鹿ヶ谷事件と称する。清盛と後白河の関係は破綻したが、親院政派の重盛の制止、代替の院の不在から後白河との全面衝突は回避された。

2. 治承三年政変

1178 年、清盛の娘徳子が高倉の皇子（のちの安德天皇）を出産、翌 79 年には重盛が死去したことで、後白河追放の条件は整った。対決を決意した後白河も、関白藤原基房と組んで人事等で清盛を攻撃したが、怒った清盛は武力で京を占領、関白や院近臣 40 名を解官・配流した上に、後白河院の鳥羽殿に幽閉

して院政を停止した。ここに清盛独裁による平氏政権が成立するに至った。

これは武力による朝廷の改変であり、鎌倉幕府による承久の乱、足利尊氏による建武新政打倒の先例といえる。清盛は、伝統的権威に立ち向かい、武力の優位を見せつけ、武士の時代を切り開いたのである。

3. 福原遷都

1180 年には外孫安徳天皇を即位させた清盛は、これに反発した後白河の皇子以仁王の反乱を鎮圧、直後に長年の拠点福原に天皇・上皇を移し、遷都を計画した。清盛は、平氏と天皇家が結合した新王朝を創出したという意識をもっていた。かつて桓武天皇が、新王朝に相応しい新都平安京を造営したことから、清盛はこの先例にならったのである。また、平安京は後白河や旧来の支配者と結合している上に、以仁王挙兵に味方した園城寺・興福寺に包囲される面があったことも、遷都計画の一因とみられる。

種々の混乱を乗り越え、11 月には安徳天皇の新造内裏も完成し、遷都も目前となった。しかし、頼朝挙兵以後激化した反乱鎮圧に全力を注ぐため、新都造営は断念されることになる。

4. 最後の闘い

清盛は、福原から京に帰ると反乱勢力に反撃を開始し、以仁王挙兵に味方した園城寺・興福寺を焼打ちするに至った。清盛は、貴族寺社等の荘園領主勢力を屈伏させて反乱鎮圧体制に組織化し、荘園の年貢を兵糧米に充てることになる。こうした体制には室町幕府と共通する先進性が見出すことができる。

頼朝が作り上げたのは朝廷・幕府が並立する公武二元体制であるが、清盛には公武一体化した新たな中世国家が見えていた。しかし

それは、清盛の死去とともに幻に終わることになる。

5. 清盛の死去

清盛は平安京の八条・九条付近に天皇・院御所を集中させ、首都改造を行っている。これは、福原にかわる新都の造営をも意味していた。しかしその最中の治承五年閏二月四日、彼は九条河原口の平盛国宅で熱病により急死するに至った。遺言は頼朝の追討と東国奪回であったという。墓所は、播磨国山田とあり、現在の神戸市垂水区舞子付近とされる。福原を愛した清盛に相応しい墓所といえる。

むすび

清盛は、保元・平治の乱といった貴族社会の混乱を鎮圧するとともに、大輪田泊における日宋貿易など、開明的な政治を行った。院・摂関家・大寺院といった既成の権威を克服し、武士の優位を示すとともに、初の武士政権を築いた人物であった。頼朝が既成の権威を温存し、公武二元体制を築いたのに対し、院・荘園領主を従属させた清盛の政治には、室町時代を見据えた炯眼が窺われるのである。

清盛の死去後、嫡男宗盛には父の構想・権力を継承する力量はなく、やがて後白河院や源氏との闘いに敗北を喫することになる。平氏は1185年、壇ノ浦合戦で源義経に敗北し、滅亡する運命にあった。

(5) 中世丹波の国人と土豪
 大山崎町歴史資料館
 学芸員 福島克彦



はじめに

丹波の森公苑では、戦国史や城郭など、度々話をさせてもらっている。今回は中世の武士団ということで、中世前期から後期にわたる丹波の武士たちを概観したいと思っている。

ご存じのように、京都は中世の都があり、天皇以下、公家、寺社などの権門が拠点としていた。こうした権門は京都に近い丹波に荘園を保持していた。その意味で丹波は京都とくわめて近い関係にあった。以前、丹波の食材というテーマで話をさせてもらったが、栗、瓜、鮎、米といったものが京都に運送されており、丹波地域の荘園から運ばれる貢納物が、都の経済を影で支えていたと言ってよい。

以下、源氏、平氏といった人たちが丹波の武士となってどのように戦国時代まで続いていくのかと言うことを大まかにお話ししたい。

1 中世丹波における流通と京都

武士の話をする前に、最近発見された大山崎の中世文書に、丹波の記述があったので紹介したい。大山崎(京都府大山崎町)は、山城(京都府の一部)と摂津(大阪府の一部)に挟まれた町で、鎌倉、室町時代は荏胡麻油を製造して繁栄していた。荏胡麻油は、おもに灯明に使われ、京都周辺で大きな需要があった。大山崎神人は、油を製造、販売する特権を時の権力者(天皇、将軍)から得て、西日本各地から荏胡麻の実を買い求めて、莫大な富を得ていた。彼らは、石清水八幡宮に勤仕する神人という身分を得て、こうした特権を得ることができた。神人は、名字と姓を両方持つような

身分であり、侍身分も保持していたため、武家様花押を使っていた。

【史料 1】田端兵衛請文(『松田文書』読み下し)

丹波国少蔵栗作木本請文之事

中村保人

壺所 栗作道圓

中村保人

壺所 栗作岡源次郎兵衛

船橋保人

壺所 栗作田端兵衛

中村保人 左衛門

壺所 少蔵 道シユン

右此外、新木ヲ立て申す事あるべからず候、次ニ京都へ油ヲ入て売り申すあるべからず事候、若背此旨申候者、日本国中神罰各蒙罷べき者也、殊ニ神方ヲ放されるべき申候、仍請状件の如し、

田端 (略押)

寛正伍年八月十九日 兵衛 ○

栗作

道圓 ○

寛正 4 年(1463)8 月、丹波国栗作の田端兵衛、栗作道円、岡源次郎兵衛、少蔵の左衛門道シユンの 4 名が、各々一か所ずつ、新木を立てていることを明示し、それ以外は一切立てないと誓約している起請文である。当時、

荏胡麻油は長木という道具で搾っていたため、ここである新木とは荏胡麻油を搾油する道具と考えられる。また、京都へ直接出て油を売らないとも誓っており、中間搾取を得ていた大山崎側の特権を侵さないことを前提としている。換言すれば、京都へ直接販売する動向があったことを匂わせる。誓約したことを破れば、日本国中の神罰があり「神方」から放逐されるとしている。

彼らの肩書には「船橋保人」「中村保人」とあり、大山崎の町名が記されている。大山崎は街道沿いに11の保(江戸時代の町にあたる)があり、船橋保、中村保は、その一つであった。しかし、これら4人の名前を見ると、明らかに大山崎の名字には現れない人名であり、やはり栗作や少蔵という丹波在住と考えるのが妥当であろう。

丹波の「栗作」は栗作郷、栗作保と言われ、古代から登場する地名で、名前のとおり栗を朝廷に貢納していた地域である。場所は篠山川下流の地域で、旧山南町域にあたる。内蔵寮が管轄していたらしく「内侍所供御物并御殿油注文」(『山科家古文書』)に油2石2斗を納めることが記されている。あるいは元弘3年(1333)5月にも「御殿油料所」と位置づけられている(『小河家文書』)。つまり、中世期は栗の後納だけでなく、油の生産地でもあった。後述するが南北朝時代に活躍した久下氏が知行するようになった。

一方「少蔵」は「小倉」「小椋」と考えられ、旧柏原町の上小倉・下小倉に想定できる。中世期は小椋荘と呼ばれ、やはり久下氏が所領としている。

したがって、彼らは「保人」とあるごとく、大山崎の保に属して、今回のような油製造の特権を得ていたことになる。しかし、彼らが

在住していたのは丹波国栗作、小椋であったものと思われる。

これらの検討から①室町時代、丹波国の栗作郷(山南町)、少蔵(小倉、柏原町周辺)において油が製造されていたこと、②製造者は大山崎の保に属して「保人」と号し、略押を記す身分であったこと、③京都への直接販売することが、大山崎の特権に抵触することになっており、それをしないことが誓約されていたこと、④基本的に大山崎では油の製造、販売は、他地域でも神人身分に属しないと許可されなかったが、本文書では「保人」という荏胡麻油の特権を持つ身分、職掌が初めて登場したこと、などの四点がうかがえる。

また、これは推定の域を出ないが、栗作、小椋という丹波の地名の共通項を探ると、幕府奉公衆の久下氏との関わりが浮かび上がる。従来、大山崎神人は原料荏胡麻の獲得にあたって、守護大名のみならず、こうした幕府側近の武家と緊密な関係が考えられてきた。たとえば、大山崎神人井尻氏は、幕府側近の赤松春日部家から散在した所領のうち、知行地を宛がわれている。今回は、神人ではないものの、前述した「保人」と久下氏との関わりが注目されよう。

当時の丹波国の物産とその流通には京都周辺の権門と、権門を背景とした住民の関与が推定される。と同時に、丹波の住民が権門や権門傘下の住民の許可なく直接京都へ販売に行くことを強く警戒されていた。これは、15世紀の都鄙間流通を考える際、重要な論点となろう。

一般に京都の権門と荘園間の支配-被支配関係が強くて、丹波独自の流通は、これに規制されていたものと思われる。前述した大山崎の油売りに例えるならば、14～15世紀には

摂津、河内、和泉、近江、播磨では荏苒麻商売を意識した社会的分業が進んだ集落が登場しており、多くの相論が起こった。しかし、丹波では、そうした傾向がみられず、史料も残っていない。さらに丹波では、畿内近国と比較すると、戦国期寺内町や城下町も顕著な勃興をみず、地元商人が台頭してくる動向がなかった。これは、丹波が後に一国単位の戦国大名が登場してこないことと関連すると思われる。

後に明智光秀は亀岡、福知山等の形成し、城下町成立の契機となった。しかし、丹波では、それ以前の都市的な集落の発達が顕著ではない。丹波という地域は、京都の経済圏に影響を受けざるを得なかったのではないかな。

2 丹波の荘園と武士団

中世丹波地域には数多くの京都の寺社、荘園などがある。神護寺吉富庄(南丹市)、東寺領大山庄(篠山市)、室町幕府御料所桐野河内(南丹市)などが著名である。こうした荘園には政所屋敷があり、年貢を貯蔵する場が構えられていた。12世紀後半、平氏の所領だった六人部荘(福知山市)では、その拠点となった大内城(福知山市)に大規模建物跡、蔵跡が検出されている。土着した荘官たちも力を持ちつつあったことを示している。

その後、13世紀に入り、源頼朝が鎌倉幕府を開くと、手柄を立てた武士したが西日本に知行地を持つことが多くなる。丹波の荻野氏、久下氏は、各々相模、武蔵出身で、後に畿内に移住し、丹波に知行地を持つようになった。久下氏は元々源氏の出であり、鎌倉前期に丹波地域の所領を獲得し、それを大事にしてきた。

承久 3 年(1221)の承久の乱時 後鳥羽上皇

が鎌倉幕府と対立し、京都周辺で戦った。その際、後鳥羽方には「諸国ニ被召輩、丹波国ニハ日置刑部丞(丹後)・館六郎・城次郎・蘆田太郎・栗村左右衛門尉」(『慈光寺本承久記』)が味方したという。蘆田は氷上郡に多いが、栗村は京都府綾部市の名が残っている。

承久の乱の結果、後鳥羽上皇は隠岐に流され、京都には西日本を統括する六波羅探題が設置された。その際、地域の諸問題にあたって、六波羅探題の命令を遵行する両使として担当武士が 2 名派遣された。鎌倉後期には、丹波へ荻野沙弥忍性が派遣された記事がある。このように、14 世紀前半までに、荻野、久下、蘆田、栗村といった武士たちが、次第に丹波地域に定着していった。

3 南北朝時代の丹波

14 世紀後半、後醍醐天皇が鎌倉幕府に対する倒幕運動を繰り広げた。元弘 2 年(1332 年)8 月、後醍醐天皇が鎌倉幕府と戦うため、笠置山(京都と奈良の間)に籠城した。このとき、後醍醐を責めるために「丹波国ノ住人久下・長沢ノ一族等」(『太平記』)が幕府軍に加わっている。その後、後醍醐は幕府に敗れ、隠岐へ流された。しかし、畿内、近国で倒幕運動が激しくなると、密かに隠岐を脱出し山陰地方に滞在した元弘 3 年(1333 年)4 月、後醍醐天皇方の千種忠顕が丹波・但馬の軍勢を率いて京都を攻撃した。その際「丹波ノ住人荻野彦六ト足立三郎ハ、五百余騎ニテ四条油小路マデ責入」ったという(『太平記』)。しかし、敗れた後に、丹波高山寺城(丹波市)に籠城を始めた。さらに幕府を見限った足利高氏が、丹波篠村八幡宮において、後醍醐方に味方した。その際「足利殿篠村ニ陣ヲ取テ、近国ノ勢ヲ被催ケルニ、当国ノ住人ニ久下弥

三郎時重ト云者、二百五十騎ニテ最前ニ馳参ル」とあるように、丹波の久下時基が真っ先に、高氏に従った。長沢、須智、山内、蘆田、余田、酒井、波賀野、小山、波々伯部もこれに準じたという。一方、これに対して、丹波の国人である足立・荻野・小島・和田・位田（綾部）・本庄（氷上郡）・平庄などは「今更人ノ下風ニ立つべきニ非ズ」と判断して、独自に丹波から若狭を通過して北陸道から京都へ行った。これらの記述から、鎌倉末期には荻野、足立、蘆田、余田、本庄、長沢、須智、山内、久下といった丹波の国人、土豪たちが出揃っていたこと、特に荻野、足立、蘆田氏らは独立した気風を持っていたことがわかる。

鎌倉幕府の滅亡後、後醍醐天皇による建武の新政が実施されるが、これが迷走したため、足利尊氏(高氏改め)は反旗を翻して独自の天皇を擁立し(北朝)、征夷大將軍となり、後醍醐天皇側(南朝)と戦うことになった。この南北朝時代、前述した国人、土豪たちは北朝方に味方する。延元元年(1336)3月、尊氏が後醍醐方に敗れて、一時九州へ逃げた際に守護仁木頼章が氷上郡高山寺城に久下、長沢、荻野、波々伯部氏らとともに籠城している。こうした経過から見ても、丹波の武士たちは北朝の足利尊氏を応援していた。

当時、南北朝期丹波では足利一門の仁木頼章が担当し、丹波の国人・土豪をまとめていた。建武4年(1337)3月、久下重基は、新田義貞の籠る越前金崎城を攻めた際に従軍した。尊氏は重基の父親時基に宛て、子息貞基、重基に軍功として丹波国新屋荘、宮田荘内興法寺村、井原荘内下司公文名などの知行を与えている(『久下文書』)。さらに、重基は和久城(福知山市)の戦いの際、守護仁木頼章の軍勢に加わり、軍忠状を提出している。

[史料2]久下重基軍忠状(『久下文書』読み下し)

久下弥五郎重基申す、今年[建武四]十月九日、和久城御発向之時御供仕り、大手攻口に於いて

(矢)

箭倉を構え、昼夜軍忠を致す之刻、同十七日後攻に御敵寄来たり之間、身命を惜まず、散々太刀打に及び、疵[右足ノコウヲ被切]をせられ畢んぬ、其子細荻野彦六郎検知せしむる上者、後證として御判をたまうべき候、此旨を以て御披露あるべし候、恐惶謹言

(私力)

建武四年十月 日 松重基(裏花押)

進上す 御奉行所

(証判)

(仁木頼章)

「承り了んぬ (花押)」

(押紙)

「仁木伊賀守」

軍忠状とは、戦争に参陣した武士が、戦いで活躍した様子や蒙った疵などを明示し、手柄を立てたことを証明する文書である。守護など、大將がそれを証明することが基本になっている。

この文書では、久下重基が大手攻口において矢倉を構えて昼夜にわたって攻撃したこと、敵方が「後攻」に來襲した際、身命を惜まず太刀を振り「右足ノコウ」を切る疵を受けたこと、子細は荻野彦六(荻野朝忠)が「検知」したので軍忠状を提出し、守護の頼章が「承了」と確認している。

ここでは、重基が足利方として丹波の戦場

で活躍している様子がわかる。また、守護仁木頼章・守護代荻野朝忠・久下重基という上下関係も確認できよう。

ただし、前述した丹波の国人の独立した気風は生きていた。現地で頭角を現した荻野朝忠は康永2年(1343)、仁木氏に反発して高山寺城に籠城した。これが仁木氏更迭の契機となり、丹波守護職は山名時氏へと交替している。氷上郡にいた荻野氏は守護に対して独立した振舞いを見せていた。

その後、北朝は足利尊氏、直義兄弟が対立する観応の擾乱が表面化した。再び守護職に復帰していた仁木頼章は尊氏と後継者の義詮が逃れてくると、石龕寺に義詮をかくまっている。この時も久下、長沢、荻野、波々伯部氏らが馳せ参じ、警固したという(『太平記』)。残念ながら荻野氏の獲得した所領は、判然としないが、氷上郡の久下氏は南北朝内乱の活躍が認められ、栗作や小倉の所領を認められるようになり、後に足利將軍家の奉公衆となった。

4 室町期丹波と応仁・文明の乱

14世紀末の足利義満の時代に南北朝は合一した。丹波では一端、戦争は終息していく。

15世紀前期の丹波は比較的平穏な時代を迎えた。丹波国守護は、管領を担い幕政にも強く関与した細川京兆家(細川家の本家)が就任した。守護代は、当初細川氏一族や内衆(小笠原氏、香西氏など)が担当し、15世紀中葉には同じ内衆の内藤氏が世襲することになる。ただし、内藤氏は、基本的に在京したらしく、丹波の拠点は見えない。また、足利氏、細川氏に関係の深い禅宗寺院、安国寺(綾部市)、長安寺(福知山市)、龍興寺(南丹市)などが、建立、中興された。また、あわせて桐野河内(南

丹市)のような足利氏の御料所も成立した。足利氏やそれが応援した権門によって、新たな荘園が再編成されていった。

言うまでもなく、当時から丹波の国人、土豪たちは守護被官と号して、権門の持つ荘園を押領しようとする動きが見られた。しかし、当時の守護や守護代は、これを停止して、京都の権門の特権や利害を守ろうとしていたことも事実である。こうした、奉公衆久下氏の所領などは、秩序を維持するなかで、その所領も維持されていた。

さて、前述してきた氷上郡の荻野氏や蘆田氏は、この当時表舞台には登場しなくなる。これは、守護代や小守護代に丹波在国の国人や土豪が就いていないこととも関連する。丹波の国人たちが守護領国支配機構のなかで不採用となり、丹波の国人が冷遇されていたとも言われている。ただし、前述した久下氏のように將軍家の奉公衆として活躍する者、あるいは天田郡の牧氏のように細川京兆家のように細川氏被官人になる者もいた。また、多紀郡、桑田郡に知行地を持つ長沢(中澤)氏は、一族が幕府奉行人として活躍している。そのため、単純に丹波の国人、土豪が冷遇されたのではなく、守護分国とは別に、幕府のさまざまな職掌に就いて丹波の所領を維持していたことになる。

こうした体制は、応仁元年(1467)に応仁・文明の乱が起こるなかで、大きく変動することになる。この大乱は、守護大名たちが細川勝元の東軍と山名宗全の西軍に分かれて争ったもので、室町幕府の体制を大きく揺るがした。特に丹波国は山名氏の任国但馬と接しているため、分国の境界は、軍事的緊張にさらされた。同年6月、山名氏が六カ国の大軍を率いて但馬から上洛を始め、丹波に進入した。

丹波守護代内藤氏はこれを夜久野(福知山市)で迎撃したが、衆寡敵せず敗北に喫した。さらに同2年3月には「丹波内藤孫四郎、足立、蘆田、夜久乱入」したという記事がある(『応仁記』)。つまり、内藤氏が反撃に転じ、足立氏、蘆田氏、夜久氏など丹波の国人たちを統率して但馬に入ろうとした。さらに9月には、同じく内藤備前守が、久下、中澤(長沢)、荻野、本庄、足立、蘆田らを引き連れて京都に入ったという(『応仁記』)。ここに再び荻野氏らも登場し、細川方の軍事力の一翼を担いつつあった。

天田郡夜久郷出身の夜久氏は、この後も細川氏に従い、摂津国で西軍の大内政弘と戦っている。また、北野社領船井荘の雑掌をしつつ、丹波に土着した小畠氏も、この大乱の時期に細川氏の被官関係を結んだことが確認される。この応仁・文明の乱を契機に夜久氏、小畠氏といった土豪が登場してくることも確認しておきたい。

5 戦国期の様相

(a)久下氏の没落

応仁・文明の乱の終わった後、将軍家、守護家の家督争い、あるいは守護間の争いが各地に波及した。こうした戦争を契機に、幕府、守護、守護代は、在地の国人、土豪の武力を活用しなければ、分国における権力行使を實踐できなくなっていった。そのため、こうした国人、土豪の存在感が増した時代でもあった。

明応2年(1493)2月、将軍義材が河内の畠山基家を攻撃する際、奉公衆の久下駿河守は、これに従軍した。その直前、京都四条町の酒屋亭主中西修理亮秀長に丹波の所領を記した証文にあたる将軍家御教書などを預けた模様である。ところが4月に管領細川政元が明応

の政変を起こして将軍義材(義植)を廃位し、新将軍義澄を擁立した。義材は、北陸へ居を移して、さらに上洛運動を続けたが、久下駿河守政光も行動をともにしたようである。さらに悪いことが重なるもので、同年7月に京都の火災に遇い、土倉が焼け、証文が焼失してしまう。2年後に中西秀長が後証として記した箇条書きによれば、下記の文書があったという(『久下文書』)。

貞和3年(1347)3月 足利尊氏御判(*沼貫荘作野村、牧山村)

延文3年(1358)2月 足利義詮御判(*新郷、柏原荘願王寺村)

延文3年(1358)2月 足利義詮御判(*桑田郡召継保、井原荘内地頭職)

応永32年(1425)8月 足利義持御判(*栗作郷領家職)

長祿4年(1460) 足利義政御判(*栗作郷地頭職、領家職、小椋荘領家職以下所々)

応仁元年(1467)11月 細川勝元による「御教書」(*栗作郷地頭職之内田畠、東金屋村)

*=記載された安堵された職、知行地

他の『久下文書』によれば、久下氏は代々将軍家より御教書を発給され、丹波栗作郷、小椋荘の他にも、かつての本貫地だった武蔵国久下郷、三河国篠田、但馬国朝来などの地頭職を書面で認められていた。ところが、秀長の史料では、それらは記されず、丹波の知行のみが記されており、実態を伴う書き方をしている。これによれば、久下氏は南北朝期に丹波氷上郡のほか、桑田郡なども地頭職を保持していたようである。後に栗作郷や小椋荘のように、旧山南町、柏原町周辺に土地を

持っていたといえよう。ところが、永正 5 年(1508)の久下正光の申状(『久下文書』)によれば、明応 8 年(1499)に一時足利義材が政元に再び敗れると、波多野氏らの守護被官が久下氏の所領を押領したという。久下に代々仕えていた「おんこのそし」(恩顧の庶子)や知行地の名主、荘官たちも「他家」の被官となってしまう、惣領の下知に応じなくなったという。久下氏は、義植(義材改め)の上洛により、京都へ戻り、所領が再び復活するが、以後も周囲の国人や土豪から押領を脅かされていた。

(b) 守護代職を争った内藤氏と波多野氏

丹波守護代職は一時期上原氏が受け持ったが、基本的に内藤氏が世襲していた。一方、15 世紀の後半には細川氏被官として波多野氏が頭角を現してくる。前述したように、波多野氏は細川の威を借りて、多紀郡に勢力を広げた。以後、16 世紀前半には内藤氏が丹波八木城(南丹市)に、波多野氏が丹波八上城(篠山市)に拠点を置くようになる。

永正 4 年(1507)の細川政元暗殺事件の後、細川京兆家が澄元系と高国系に分裂し始めた。当初、丹波国内に目立った対立軸は形成されなかったが、大永 6 年(1526)、澄元系の晴元と高国の争いが勃発すると、晴元方の波多野秀忠と高国方の内藤国貞が守護代職をめぐって一気に対立が表面化した。この時の抗争はさらに複雑となり、丹波国衆たちも二分して、各地で抗争が続いた。

天文末年から永禄年間に入ると、中央政局では三好長慶が登場し、細川京兆家の対立軸を解消し、一気に畿内近国を平定する勢いとなった。丹波でも、これの支援を受けた内藤宗勝(松永長頼)が勢力を伸ばし、一時丹波

一国を席卷した。ところが、彼も永禄 8 年(1565)8 月に氷上郡黒井の荻野直正に敗れて戦死してしまう。

同 11 年 9 月、織田信長が將軍足利義昭を奉じて上洛すると、丹波国衆の多くは、これに従った。その際内藤氏も將軍義昭に仕えている。ちなみに当時の当主と推定される内藤ジョアンはキリシタンとなっている。元龜 4 年(1573)、信長が義昭を追放されると、これに従い西国へ下向している。内藤氏は、以後も丹波に在国していたようだが、天正 9 年(1591)に一族が越前に下り、織田氏の部将柴田勝家の家臣になっている。内藤ジョアンは、後に小西氏、前田氏に仕え、慶長 19 年(1614)にキリシタンであるため、国外退去を命じられた。

波多野氏は、明智光秀の丹波攻略の際、一時光秀を裏切ったため、その怒りを買った。天正 6~7 年の八上城で波多野氏は滅亡した。

(c) 赤井氏の勃興と荻野氏との連携

荻野直正の勢力拡大には赤井氏と荻野氏の連携があった。荻野氏は前述してきたように、氷上郡、天田郡を中心に勢力を保持していたが、戦国期は特に氷上郡朝日(旧春日町)に拠点を集約化しつつあった。

一方、16 世紀前半には、氷上郡赤井野を基盤とした赤井氏が次第に勢力を伸ばしてきた。永正 13 年(1516)3 月には、赤井時清という人物が、前述した栗作荘の領家職を違乱した記事があり(『守光公記』)、加古川上流域から、篠山川流域まで進出していたことがわかる。

天文末年頃、赤井時家は子息才丸(後の直正)を荻野氏の猶子へ出した。荻野氏側には、不満があったらしく「雑説」が時家の耳に入ったが、猶子政策をそのまま押し通した(『荻

野文書』)。こうして赤井氏と荻野氏が連携し、赤井時家と荻野直正の連署状が複数残っている。赤井氏と荻野氏が上位のクラスに入ったことになる。

時代が下るが、天正 12 年(1584)に羽柴秀吉と徳川家康が戦った小牧・長久手合戦の際、同年 5 月に蘆田時直が徳川と連携し、黒井城など占拠する事件が起こっている。その際、蘆田時直は赤井氏の一族になっており、家康勝利の暁には荻野直正の子息を取り立てることか約束されていた。つまり、氷上郡の名族蘆田氏も荻野氏、赤井氏と一族関係を結んでいたことがわかる。戦国後期、赤井、荻野、蘆田氏らが連携し、丹波における第三極を形成していったものと思われる。ちなみに、この戦いで蘆田時直は秀吉からの攻撃を受け、勝利を得ることはできなかったが、徳川方との縁ができ、赤井氏は幕臣に入っている。

(d)丹波・但馬に両属する夜久氏

境界線に接する勢力として夜久氏がいる。前述したように、夜久氏は、応仁・文明の乱の頃から歴史の舞台に登場し、細川氏の被官となって活躍している。15 世紀末に建仁寺領夜久郷の政所屋敷について保持するようになり、地元に対する支配権を行使するようになった。16 世紀中葉には内藤氏に従い、内藤宗勝の氷上郡の戦いでも活躍していた。しかし永禄 8 年 8 月に宗勝が戦死すると、すぐに荻野直正の傘下に入っている。

文書的には、内藤氏との関わりが強く、その戦争にも参陣しているが、一方で地理的環境から但馬の山名氏やその重臣たちとも音信を交わし、交流していた。特に 16 世紀の夜久宗説は連歌に対する造詣が深く、やはり連歌文化を大事にしていた山名氏家臣団と交流

があった。また、夜久郷は丹波と但馬を結ぶ回廊のような地形であり、街道通行を安全なものとする路次警固の役割を果たしていた。但馬の山名氏、あるいは羽柴秀長などが路次警固を依頼している。

したがって、夜久氏は丹波に属しながらも但馬とも人脈をつくり、その知行地を守ろうとした。明智光秀の丹波攻略の際に、一時但馬へ避難することがあったが、江戸初期に再び夜久郷へ戻り、地元に着した。

6 織豊権力支配下の丹波

戦国期内藤氏の八木城、波多野氏の八上城、荻野氏の黒井城など、戦国の三強の山城が、そのまま丹波の三大山城と言われる。城域の規模は、丹波でも有数で、やはり郡単位の権力と比例していた。ところが、城下町はあまり発達を見ない。丹波一国を束ねる経済拠点は形成されず、京都を中心とした経済圏の傘下に入っていた。

しかし、明智光秀が天正 3～7 年(1575～79)の攻略戦で、丹波一国を制圧すると、亀山城や福知山城を新たに築き、拠点とし始めた。明智期の城下町がどの程度進展したかわからないが、この二つの町が丹波の口郡、奥郡の近世城下町へ継承されていった。

天正 10 年前後に、光秀や秀吉は、丹波国内の国人、土豪たちに当知行目録を指出すように命じ、その知行高を確定した。さらに太閤検地も実施され、武家領主と、かつての権門との関わりで錯綜した支配関係が整理されていった。

おわりに

以上、中世前期から後期にかけて、丹波の国人、土豪の歴史を概観してきた。中世前期に関東から移住してきた荻野氏と久下氏、細川氏内衆から次第に丹波国守護代職を担った内藤氏、16世紀に入って次第に勢力を拡大した波多野氏、また荻野氏と連携して氷上郡に君臨した赤井氏と、各領主の動向は当然ながら千差万別である。さらに丹波と但馬に両属していた夜久氏なども含めていくと、その多様さは拡大し、一口に丹波の国人、土豪といっても多種多様な展開を見せている。

ただし、今回のように、各氏が、どのような時期に登場し、活躍していったかを辿っていくことは重要である。近年、中世後期丹波では守護細川氏の分国として捉えられ、その変遷と変質を軸に議論がされている。したがって、前述してきた国人、土豪の議論も、守護分国における登用の差異で議論されてきた観がある。しかし、荻野氏のように、独立した気風を持ちつつ、在国し続けていたことは重視すべきであろう。こうした多様性のなかに、丹波で研究していく意味を、今後とも問うていきたい。

【参考文献】

- 島本町教育委員会『松田家文書調査報告書』
2012
兵庫県『兵庫県史』史料編中世3 1988
細見末雄『丹波史を探る』神戸新聞出版社
1988
今谷明『守護領国支配機構の研究』法政大学
出版局 1986

3 講師等プロフィール

脇田 晴子氏

兵庫県西宮市生まれ。父は俳人の麻野恵三氏（微笑子）。神戸大学文学部史学科卒業。京都大学大学院文学研究科にて文学博士取得。京都橘女子大学文学部教授、鳴門教育大学学校教育学部教授、大阪外国語大学教授を歴任。現在、石川県立歴史博物館館長。著書に、「中世に生きる女たち」「中世京都と祇園祭 疫神と都市の生活」「能楽のなかの女たち」「日本中世女性史の研究」他多数。2010年文化勲章受章。

元木 泰雄氏

兵庫県西宮市生まれ。京都大学文学部卒業。「院政期政治史研究」で京都大学文学博士。現在京都大学大学院人間環境学研究科教授。著書に、「武士の成立」「平清盛の闘い 幻の中世国家」「河内源氏 頼朝を生んだ武士本流」「平清盛と後白河院」「保元の乱・平治の乱を読みなおす」「源義経」「院政期政治史研究」他多数。

福島 克彦氏

立命館大学文学部卒業。専門は日本中世都市史、城郭史。丹波地域の戦国史、城と城下町の研究において大きな功績がある。現在、大山崎町歴史資料館学芸員。著書に「畿内・近国の戦国合戦」。主な論文に「織豊期における城郭・城下町の地域的展開」「城郭研究から見た山科寺内町」「明智光秀文書目録」等がある。

大江 篤氏

関西学院大学大学院文学研究科日本史学専攻。関西学院大学にて博士取得。現在園田学園女子大学教授。専門は日本民俗学、日本古代史。兵庫県文化財保護審議会委員、東アジア怪異学会代表、日本民俗学会評議員、篠山市歴史文化基本構想策定委員会委員等を歴任。主な著書に「日本古代の神と霊」「怪異学の可能性」。

杉崎 貴英氏

静岡県生まれ。同志社大学大学院文学研究科文化史学専攻。現在、京都造形芸術大学通信教育部非常勤講師。専門は日本仏教美術史・日本宗教文化史。主な論文に「勸賞（けんじょう）譲与による仏師の僧綱位叙任をめぐって」「石清水八幡宮祐清造立の阿弥陀像と解脱房貞慶」等がある。平成23年度より大手前大学史学研究所がおこなっている「達身寺総合調査」に参加。

【現地見学会】

達身寺（丹波市氷上町清住）

丹波地方で最も早く開創され、今に多くの文化財を残している。寺伝によると、行基菩薩がはじめて開いたといわれるが、詳しいことは分らない。山岳仏教が栄えるようになってから、この地に壮大な伽藍がいとなまれ、多くの仏像が造顕されたことは疑う余地がなく、今に残る優秀な仏像群は雄弁にその事実を物語っている。国の重要文化財に指定されている薬師如来坐像、吉祥天立像、兜跋毘沙門天立像、聖観音立像、十一面観音立像などは、いずれも密教が栄え、力強い彫像が多く作られた平安時代前・中期の作品であり、地方では数少ない遺例である。また、同じ重要文化財の十一面観音坐像、地藏菩薩坐像、阿弥陀如来坐像は、それに続く平安時代後期のものであり、彩色された薬師如来坐像は鎌倉初期の像内銘をもっている。指定を受けていない同時代の仏像はまだこの他にもたくさんあり、このころの達身寺がいかに繁栄していたかを察することができる。

平成23年度から大手前大学史学研究所が、達身寺の学術調査を始めた。本格調査はおよそ50年ぶりといい、学内外から彫刻史や文化財計測、修復の専門家らが参加。5年をかけ、3次元計測で寸法や形状のデータを集めるほか、傷み具合も把握し、保存に役立ててもらおうという。制作過程や由来などは謎に包まれており、解明が期待されている。

4 編集後記

日本の中世史を主に専門とされている講師先生がおっしゃるのは「古文書や記録の分析などで研究を続けているが、分かりづらい部分がとりわけ中世史にはずいぶんある。そういった難解な部分を読み解くには、より多くの古文書や記録をきっちり読みこむことが大切である。」ということでした。

今回の講座では「中世・武士・丹波」にスポットを当て、まずは当時の政治状況をはじめ時代背景を大きくとらえた上で、丹波に興った武門の歴史を知り、さらに丹波人たちの庶民の暮らしを「祭りや民俗芸能」を通して学んでいく連続講座として開催してまいりました。

受講者の方からは「初めて受講したが、丹波一帯の中世の様子が理解でき、地域への親しみが沸いた。」「史料も多数あり、史実に基づいた内容に満足した。」という声をいただいた他、「さらに地元丹波が中心の内容となる講座を組んでほしい。」「ブームにとらわれず、今回学んだ中世史からつながる、継続的な講座を希望する。」といったご意見も頂きました。

地元中心の講座やブームにとらわれない内容などのご意見をお聞きし、今一度、本講座の原点に立ち返って新たな企画をしていかなければと強く感じました。

そもそも、講座「丹波学」は、兵庫丹波の伝統、文化、人物、言語などを総合的に考えていく「地域づくり」を目指した地域学としてスタートしました。丹波地域（篠山市・丹波市）を多様な切り口から学習・研究する「地域学」ですから、丹波地域の森羅万象、そして丹波地域に関する書物及び情報のあらゆるものが、「丹波学」の教材になります。今が旬の生きた教材を提供していくことで、皆さんの生きがいにつながり、生き生きとした地域づくりにつながっていくことが開設の願いであり、それは、次の3つに集約されると考えています。

1 丹波地域を知る

「丹波学」が、より多くの人にとって、丹波地域についての多面的で的確な知識を得るための学習の場となることです。

2 丹波地域に生きる

「丹波学」を通じて、その地域に住む自分を振り返り、その地域で生きる者としての認識を新たにしていくことです。

3 丹波地域を創る

「丹波学」で培った知識を基にして、学習者自らがこの地でより良く生きていくために、これから地域とどのように関わっていくか、地域をどのように創っていくかを考えることです。

複数回受講いただいている多くの方に支えられ、育てられてきた本講座の原点に立ち返り、楽しく、深く、分かりやすい講座を企画していきたいと思えます。

そして、本講座が皆様にとって地域の活性化につながる新たな展開の一助となれば大変嬉しく思います。

平成２４年度 講座「丹波学」講義録

平成２５年３月 発行

発行 （公財）兵庫丹波の森協会

丹波の森公苑 文化振興部

〒６６９－３３０９

丹波市柏原町柏原５６００

TEL ０７９５－７２－５１７０

印刷
